

第2期  
与謝野町高校魅力化ビジョン  
(中間案)



令和6年12月

与謝野町

宮津天橋高等学校加悦谷学舎

～ 目次 ～

第1章	高校の現状と高校魅力化推進事業・魅力化ビジョン策定の必要性	1
第2章	第1期ビジョン：学社協働で目指した学び	12
第3章	第1期ビジョン：学社協働の学びの実践と成果	15
第4章	第2期ビジョンの取り組みに向けて	24
第5章	第2期高校魅力化ビジョンが目指すもの	29
第6章	高校魅力化ビジョンの具体的な事業や取り組み	31
第7章	高校魅力化ビジョンの推進体制と役割分担	33
第8章	与謝野町が誇る地域DNAと高校から学舎へと引き継がれる加悦谷DNA	34

## 第1章 高校の現状と高校魅力化推進事業・魅力化ビジョン策定の必要性

### 1. 高校の概要

宮津天橋高校加悦谷学舎の前身である加悦谷高校は、「地域の子どもたちは地域で育てる」という情熱を原動力に、地域住民、教員、自治体の協働によって、昭和23年に創立され、以降、70年以上に渡り、幾多の有為な人材を輩出してきました。

昭和47年からは、同じ情熱と協働によって創立された与謝の海支援学校との交流がスタートし、50年以上続く伝統事業になっています。

部活動も活発で、合唱部は平成2年から5年連続全国制覇、シューベルト国際合唱コンクール総合1位を4回獲得。ウェイトリフティング部も平成16年からインターハイ学校対抗3連覇を成し遂げ、北京オリンピックの入賞者も輩出しています。

なお、近年は、文化系部活動の合唱部、書道部、茶道部等が、積極的に地元イベントに参加し、地域に活力を発信しているほか、体育系部活動においても、地域開放型スポーツクラブ「ジラソーレ与謝スポーツクラブ」等を通じて、地元の小中学生との交流を深めるなど、地域に開かれた活動が展開されています。

しかし、全国的な少子化の流れの中、生徒数は、昭和56年の入学定員270人をピークに減少し続け、令和元年度以降の募集定員は80人となっています。

さらに、平成28年頃から丹後地域の高校再編の議論が持ち上がり、令和2年4月に、加悦谷高校は、宮津高校と合併し、宮津天橋高校加悦谷学舎として、新たな歴史を刻むこととなりました。

令和6年で、加悦谷学舎となって4年が経過しました。少子化に伴い、生徒数の減少は続いています。加悦谷高校当時と同様、「地域とともに未来へ」を掲げ、地域に活力を発信し続けており、その活力は年々、大きくなっています。



## スクールミッション 社会的役割等

文武両道を重んじる普通科を設置する学舎制高校として、スポーツ活動を充実させることにより、課題発見能力と確かな学力を身に付け、仲間と共に支え合い未来を切り拓く力を備えた人材を育成する。

## 教育理念

真理と正義を希求し、豊かな人間性を備え、幸せな人生と社会を創造する人間を育成する。

## 1. スクールポリシー 3つの方針（このような力を育てます）

～社会的使命感と青雲の志～

- 1 幅広く深い知識と教養を身に付け、豊かな情操と道徳心を培う。
- 2 自主自律の精神を養うとともに、主体的に社会の形成に参画し、その発展に貢献する。
- 3 伝統と文化を尊重し、郷土を愛し、地域社会を守り受け継ぐとともに、国際社会の平和と発展に寄与する。

## 2. 教育課程の編制及び実施に関する方針（このような教育活動を行います）

～平日6時間授業（週30時間）＋放課後活用＝一人一人の可能性を伸ばす～

- ① 確かな基礎学力に基づいた課題発見・解決力を身に付け、主体的に未来を切り拓くことのできる能力を養う。
- ② 他者との対話や議論を通じて、互いに多様性を認め合い、協働していくことができる態度を養う。
- ③ 学校と地域社会との「学社協働」を通して、持続可能な地域社会の在り方を探究することで、自身と社会のwell-being（幸福）につなげる姿勢を育てる。
- ④ 特にアスリートスポーツコースでは、専門競技を探究するとともに、マリン・ウィンタースポーツ体験及び小・中学校や支援学校との交流を通して、周囲への感謝を忘れず謙虚さを併せ持つ態度を養う。

## 3. 入学者の受入れに関する方針（このような生徒を待っています）

～学習×部活動×地域社会＝幸せ織りなす人生～

- ① 授業、探究活動や部活動等を通して、仲間と協働しながら充実した高校生活を送り、豊かな人間性・社会性を身に付けたい生徒
- ② 知的好奇心を持って地域社会で学び得た知識や技能を、将来にわたって社会の持続発展や自らの幸せにつなげようとする生徒
- ③ 仲間と協力しながら自らの専門競技や文化部活動等に打ち込むとともに、謙虚な心や豊かな感性を身に付け、チームに貢献し続ける生徒

～コース編制～



～進学・就職状況～

年度	進学（合格状況）				決定状況	卒業生徒数
	国公立大	私立大	私立短大	専・各等	就職	
令和3年度	3	18	9	26	18	76
令和4年度	4	23	15	19	16	77
令和5年度	5	24	15	19	15	78

～地域別就職状況～

年度	京都			他府県	その他	合計
	丹後管内	中丹地区	京都府南部			
令和3年度	8	2	4	2	2	18
令和4年度	3	5	4	3	1	16
令和5年度	8	3	3	0	1	15

～部活動加入状況～

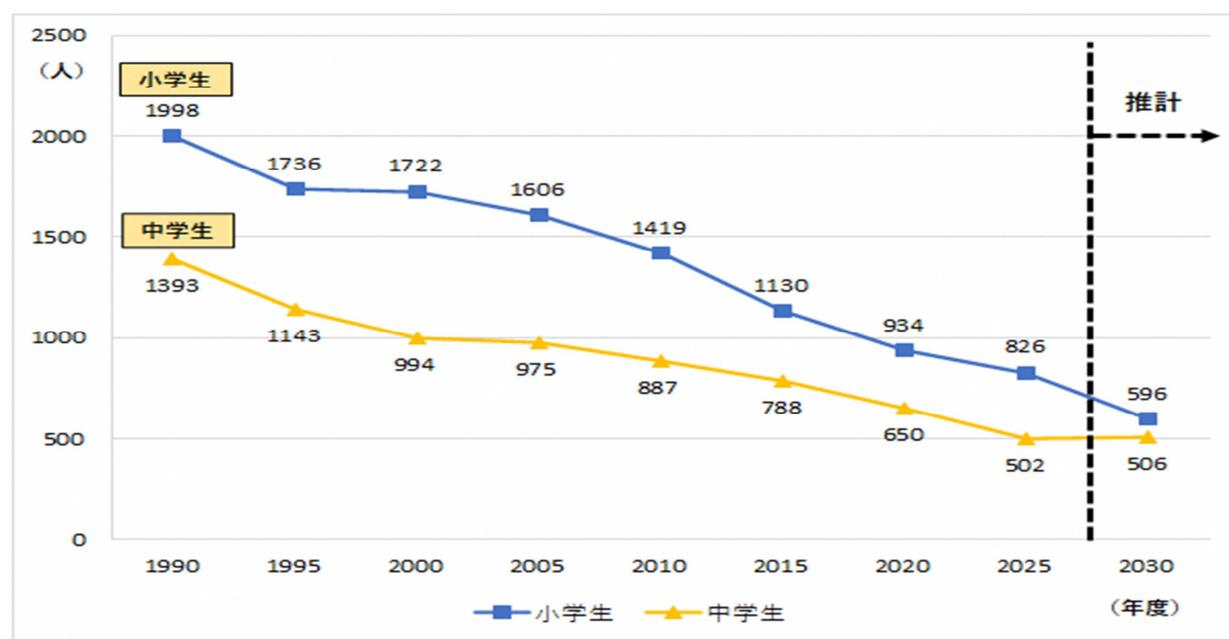
年度	1年生	2年生	3年生	全体
令和4年度	73.5%	72.2%	71.4%	72.4%
令和5年度	83.5%	55.0%	65.0%	67.8%
令和6年度	82.5%	85.7%	51.6%	73.3%

2. 町内小中学校児童生徒数の推移・高校の募集定員と今後の予測

本町の児童生徒数は下図のとおり減少の一途を辿っています。平成28年度以降、再編により小学校数は3校減少し、最も人口が多い野田川地域の江陽中学校においても、令和3年度の入学生から2クラスとなるなど、今後もこの減少傾向が進展していくことは確実な状況です。

また、加悦谷学舎の募集定員も、少子化に伴い、平成24年度までは160人で推移していましたが、令和元年度以降は80人と、わずか数年のうちに半減しています。

～児童生徒数の推移～ ※中学生は橋立中学校区内の宮津市の生徒数を含む



～生徒募集人員の推移～

平成7～24年度	平成25年度	平成27年度	平成29年度	令和元年度～
160人	130人	120人	90人	80人

～志願者数の推移～

年度	募集定員	前期合格者	中期募集人員	中期志願者	中期倍率
令和2年度 2020	80	16	64	67	1.05
令和3年度 2021	80	16	64	66	1.03
令和4年度 2022	80	16	64	47	0.73
令和5年度 2023	80	24	56	34	0.61
令和6年度 2024	80	24	56	39	0.70

3. 町内中学生の加悦谷学舎への進学状況

本町にある3つの中学校から加悦谷学舎への進学率（橋立中は宮津市の生徒も含む）については、平成30年度から令和2年度までは、約25%で推移していました。

令和4年度（令和5年度入学）に20%を割り込みましたが、令和5年度（令和6年度入学）は25%近くまで回復しました。

また、丹後通学圏内公立校への進学率は全体的に下がっており、私立高校への進学率が上昇している傾向にあります。

区分	令和3年度	令和4年度	令和5年度
加悦谷学舎	21.5%	19.4%	24.5%
丹後通学圏内公立校	49.6%	44.5%	43.1%
丹後通学圏外公立校	6.1%	5.2%	4.8%
私立高校・その他	22.8%	30.9%	27.6%

4. 現状の環境分析

区分	魅力	課題
生徒	愛嬌と愛郷 根っこにある優しさ 伸びしろ・可能性	基礎学力・想定力・準備力の弱さ グループ以上チーム未滿 自己有用感の低さ
高校	多様な進路希望への対応 少人数教育 良質な就職先の確保	ノウハウや熱量の継承の難しさ 業務の多忙化・マンパワー不足 大学進学メインの学校選び
与謝野町	豊富な教育資源（人・歴史文化・技術） 保幼小中高までの教育環境 見える人間関係（温かさ・強さ）	人材（後継者）不足・就きたい仕事不足 厳しい財政・経済状況 地域としての自己肯定感の低さ

#### 4. 与謝野町の課題の掘り下げ

##### (1) 消滅可能性自治体

与謝野町は平成18年3月に旧加悦町、旧岩滝町、旧野田川町の3町合併により誕生し、合併当時の人口は2万5千人を超えていましたが、令和5年度には2万人を割り込みました。今後も人口減少は進展する見込みであり、国立社会保障・人口問題研究所の令和5年時点の推計によると、2040年の本町の人口は13,589人と推計されています。

また、日本創生会議が平成26年に、人口戦略会議が令和6年に、それぞれ公表した消滅可能性自治体に本町は該当しています。

しかし、この指標は、20代から30代の女性の人口の減少率を基に作成されたもので、必ずしもバランスのとれたものではありません。なぜなら、本町の町づくりや地域づくりに想いをもって取り組んでおられる人の数を考慮していないからです。そして、この部分に、消滅を避ける可能性があると考えます。ついては、このレポートの趣旨が、各自治体で危機感を持って対策を練ることを促すものであることを冷静に受け止め、持続可能な町づくり施策とは何かを検討する必要があります。

##### (2) 平均所得

各自治体の市町村税の課税状況等の調査数値を基にした与謝野町の平均所得は、ここ数年、府内ワースト3位から5位で推移しています。

平均所得額そのものは少しずつ上昇していますが、コロナ不況や不安定な世界情勢などを要因とする物価上昇は、各世帯の可処分所得の減少につながります。

本町としては、それが子どもたちの進路に影響することを懸念しています。保護者も子どもも経済的に無理をして進学をした結果、保護者は町税、子どもは奨学金の納付が滞り、生活を脅かすようなことがあれば、それはみんなにとって不幸なことです。

ついては、国、府、町の行政全体による支援の必要性に加え、家族内においても、自分が将来、どこまでを目指し、どれだけの費用が必要なのか、保護者もどれだけの費用を負担ができるのかという点について、早い段階からしっかり話し合っておく必要があると考えます。

##### (3) 自己肯定感

本町の歴史を振り返ると、団塊の世代以降の人たちは、織物業の好況もあり、高校卒業後に地元に残る人も多く、進学によって、一旦、地元を離れた人も家業を継ぐためであったり、家を継ぐために地元に戻って来ていました。

これが、団塊ジュニア世代以降になると、織物業のピークが過ぎ、親からも無理に帰ってこなくていいと言われるようになりました。この時期あたりから町全体の自己肯定感が徐々に下がってきたものと推測しています。自己肯定感の低さは、人口減少にも経済状況にも影響を及ぼします。

しかし、近年、町内では、建築×介護、土木工事×農業という新たな事業形態や、参加、体験など、コミュニティ機能を併せ持つオフィスやカフェなど、多様かつ斬新なチャレンジを始める経営者の動きが見えるようになりました。この動きを起こしている経営者に共通しているのは、地域への誇りと愛着を持っておられることにあります。

こうした経営者を育てたのも、この地域であり、本町としては、地域への誇りと愛着が自然な流れで、育まれ、町全体に広がり、最終的に町全体の自己肯定感の向上、循環につながる取り組みが求められていると考えます。

## 5. 高校の存在が町づくりに与える影響

学舎制の導入により、町内唯一の加悦谷高校は、宮津天橋高校加悦谷学舎として存続されることとなりました。

府立高校は行政上、町の管轄外となりますが、高校は町にとって財産であり、生命線でもあります

文部科学省の統計によると、平成14年度～29年度までの15年間で約1000校を超える公立高校が廃校になっています。民間のシンクタンクが、高校がある町と高校がなくなった町の比較を検証した結果、高校がなくなった町の方が人口減少が加速していることがわかっています。

ここで本町にとって、高校の存在が町づくりに、どのような影響を与えるのか、以下のとおり整理しました。

区分	見込まれる効果・影響
高校がある町	<p>より多くの熱量人口・将来の地域貢献人材を育成できる</p> <p>人づくりの町として移住定住を呼び込むことができる</p> <p>町づくりの参画者としての可能性を引き出すことができる</p> <p>距離的な近さという全てにおいて便利で有利な環境が確保できる</p> <p>地域の子どもは地域で育てるという誇りある教育を展開できる</p> <p>広域連携行政が進展しても地域の存在感を示すことができる</p>
高校がない町	<p>町の熱量を伝える機会の喪失</p> <p>人口減少の加速</p> <p>地域活力の低下、地域が大切にしてきた歴史文化の衰退</p> <p>財政支援（通学補助・奨学金等）の必要性の増大</p> <p>教育の空洞化・二極化の進展</p> <p>広域連携行政推進における地域の存在感の希薄化</p>

## 6. 町づくりにおける高校の必要性

子どもの成長を段階別に区分すると、幼児は萌芽期・形成期、小学生は涵養期、構築期、中学生は流動期、葛藤期、高校生は展望期、移行期に分類することができます。

現在、本町では、保幼小中に加え、高校においても積極的にふるさと学習を展開していますが、やはり、保幼小中の積み重ねに加えて、社会への参画を展望し、大人へと移行していく時期にあたる高校生に対し、地域の魅力や課題を伝えた上で、「未来を一緒に創ろう！」と、訴えることが、人づくりとして有効であり、それを町内唯一の高校の教育の中に組み入れることで最大の効果を見込むことができます。

これは、町内に高校があるからこそできることであり、高校は先人が遺してくれた貴重な財産であると言えます。

また、福知山公立大学の研究によると、①町の魅力を知っていること、②町にどんな仕事があるかを知っていること、③健全な家庭環境であることが、将来の定住と強い相関があり、これらの項目を18歳までに備えていることが重要であると指摘されています。

本町としては、高校の学びに地域が密接に関わり、支援をすることで、町に愛着と誇りを持てる人づくりに努め、将来の地方創生、地域活性化へつなげ、持続可能な町づくりを推進していくこととします。

## 7. 全国の高校魅力化事例とその効果

高校魅力化とは、社会に開かれた学校を推進し、生徒と地域住民との共学によって、「地域を元気にするために都会の大学で学んで戻ってきたい!」と考える若者と、「若者がここに帰ってきたいと思える町をつくりたい!」という地域住民の相乗効果により、魅力ある学校と魅力ある地域を共創することが目的です。

この目的を実現するため、全国で取り組まれている魅力化事業については、以下の3つが施策の柱となっていることに加え、近年は、学校給食を高校にも提供するといった自治体独自の支援も見られるようになってきています。

また、「地域みらい留学」という名称で、全国から高校生を受け入れている高校は令和6年度で145校、越境入学した生徒の総数は3192人（令和元年度～6年度）にのぼります。

さらに、高校2年生の1年間だけ、今通っている学校に在籍しながら他校で学ぶ「地域みらい留学365」という制度については、受け入れ校が22校、留学した生徒総数は約100人（令和2年度～6年度）となっています。

なお、この事業を推進するにあたり、各自治体は地元の高校に対し、多額の経費（数千万円～1億円超）を支出しています。

令和元年に、民間のシンクタンクが、高校魅力化の先駆けである島根県立隠岐島前高校と島前地域を構成する3町村の取り組みを分析し、その効果を以下のとおり発表しました。

Uターン率が向上した背景としては、郷土愛と学習意欲の醸成を狙いとした地域探究、「仕事がなければつくればいい!」という地域起業家精神を伝えるキャリア教育の推進が実を結んでいることなどが挙げられます。

No.	魅力化施策	目的
1	教育寮の整備・寮生への支援	生徒の全国募集と地元生との交流による学校の活性化
2	公営塾の整備・運営	学力伸長及び進路保障・地域キャリア教育の推進
3	地域探究・地域実践の推進	地域探究・地域実践の推進による郷土愛と学ぶ意欲の醸成

No.	魅力化施策の効果	説明
1	総人口の増加	約5%の増加（地域外流出の鈍化とUターン者の増・平均年間出生数の増）
2	歳入・消費額の増	毎年の支出（1億円超）を差し引いても、年間約3～4千万円の経済効果
3	Uターン率の向上	平成16～20年度 15.2% ⇒ 平成23～27年度 24.9%

## 8. 町と高校との魅力化推進事業の経緯（平成28年度～令和5年度）

丹後地域の高校再編の議論が浮上した際、町内においては、まず、卒業生を中心とする地域団体が結成され、町との意見交換や、高校存続の要望書を京都府教育委員会に提出するなどの活動を展開されました。

本町と高校においては、平成28年度から30年度までの3年間、魅力的な学校づくりの議論を重ねつつ、生徒の成長と将来の地方創生・地域活性化につながる事業を少しずつ実施し、関係性の強化と有効な取り組みを模索してきました。

ただ、この期間は、一方からの依頼に対して、もう一方が支援や協力をするという「連携」のレベルに留まり、魅力ある学校を共に考え、共に創るという「協働」のレベルまでは達し

ていませんでした。

そこで、令和元年度から、町と高校の架け橋として、高校魅力化コーディネーターを常駐配置して以降は、共にできることが飛躍的に増え、手探りながらも生徒の成長につながることを次々と実行しました。令和元年度から3年度までは、試行を進め、協働のレベルまで達した期間と捉えています。

協働のレベルに達した令和3年度には、学社協働の取り組みと生徒の意識や成長のつながりを継続的に調査・検証すること、人が入れ替わってもブレない軸をつくり、適切に変化させていくことによる持続可能な体制づくりを目指し、町と高校で第1期ビジョンを策定し、令和4年度からの3年間で、学社協働の学びの完成を目指すこととなりました。

年度	主な取組	内容
平成28年度	加悦谷高校活性化委員会の設置 魅力化先進校の視察	協働による魅力的な学校づくりを議論 行先：島根県・広島県
平成29年度	加悦谷高校魅力化ワーキングチームの設置 小高スポーツ交流の移動支援を開始	研修会の実施（講師：6名） 全小学校との交流可能な体制の整備
平成30年度	高校魅力化コーディネーターの募集開始	年度中は採用に至らず
令和元年度	高校魅力化コーディネーターの常駐配置 地域探究学習を協働で実施	町と高校との関係性の強化・魅力化の推進 テーマ：丹後ちりめん
令和2年度	よさの高校生広報室@みらいの発足 総合型選抜対策講座の開始	町の魅力を生徒自らが発信 学年の1/3（30名）が受講
令和3年度	Kayadani仕事図鑑の開始 産業振興会議・地域デザイン会議への参画	10回開催（14分野） 主権者として町づくりの議論に参画
令和4年度	学校説明会・学校見学に町職員が参加	協働による学校のPR
令和5年度	コーディネーター業務の委託化の開始 Kayadani仕事体験の開始	町と高校との関係性の継続・魅力化の推進 19事業所が受け入れ

## 9. 町と高校を目指す魅力化の方向性

### （1）人材の還流・人材の自給自足

本町では、高校卒業時点で約8～9割の生徒が都会へと進学、就職し、そのうちわずかな人数しか地元に戻ってこないことが恒常的な課題となっています。

また、本町だけでなく、日本全体の人口が減少することは確実であることから、人口減少社会における地方創生のポイントは、「町内の熱量ある人口の割合を増やすこと」にあります。

本町における熱量人口とは、「他者に良い影響を与える自分らしさをもった人の集合体」と定義しています。

近年、これらの地方創生の文脈の中で関係人口、交流人口の重要性が叫ばれていますが、まず、町内の熱量人口の割合を増やすことが、関係人口・交流人口を呼び込む上での前提条件となります。

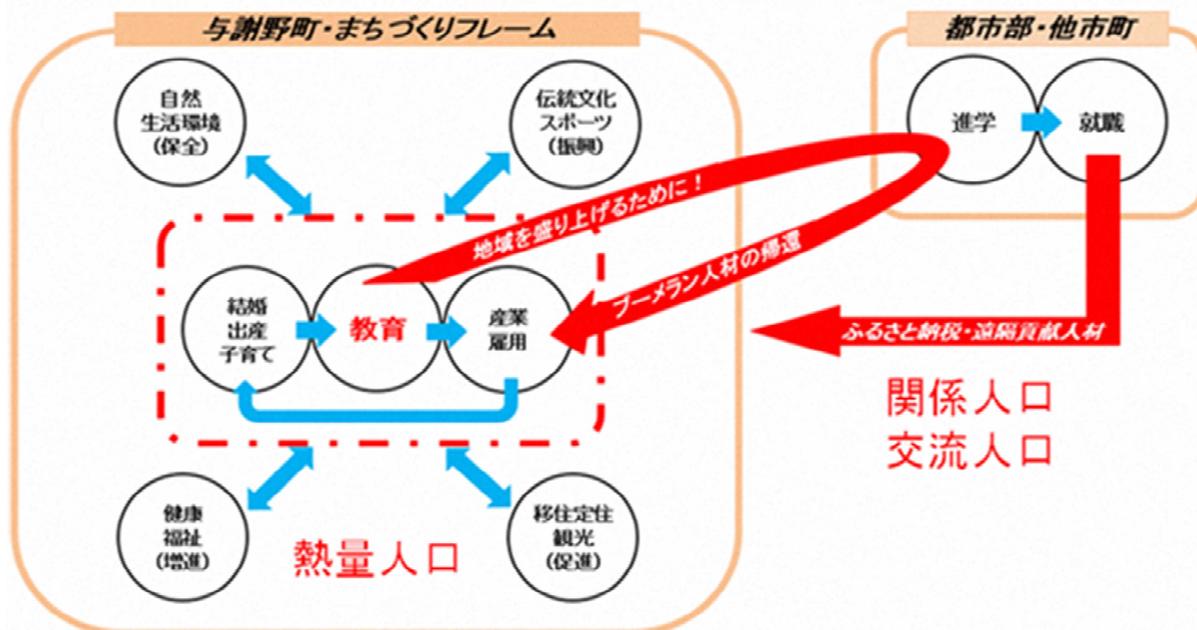
下図のとおり、人材が還流する町、人材の自給自足を目指すためには近道も秘策もなく、保幼小中高の学びを通じて、町の魅力や課題、想いを地道に伝えていくことが重要です。

なお、地元の熱量人口の割合の増加を軸としつつも、高校を卒業するまでの間に町の魅力

をしっかり伝えることができれば、将来、世界のどこで暮らすことになったとしても、故郷に対する誇りという心の部分で地元とのつながりを持ち続けることができます。

そして、そうした人材は、いずれ、町外における強力な関係人口になってくれると同時に、町の魅力を正確に広めることによって、より多くの交流人口を本町へともたらしてくれるはずです。

## 教育を核とした人材の還流・自給自足モデル



熱をもって接すれば熱をもって還ってくる

### (2) 魅力化と財政負担とのバランス

全国で取り組まれている魅力化施策のように、毎年、数千万円から1億円超の支出は自治体にとってかなりの負担となります。

この多額の支出を要する主な要因としては、各自治体ともに、人口減少、生徒数の減少がかなりひっ迫してから魅力化事業をスタートさせていることが挙げられます。

それに対して、与謝野町は、急速に加速する人口減少に直面していますが、まだ地元有一定数の児童生徒がいる段階から高校を支援することができています。

したがって、加悦谷学舎を選んだ生徒に投資を集中し、内発的な地方創生を推進することができると同時に、「最小の経費をもって最大の効果を生む魅力化」を目指すことができます。

本町の魅力化においては、「町づくりは人づくり」という行政の基本方針と、「入りを量って出を制する」という財政負担とのバランスの両立が肝要です。

### (3) 町づくりにおける普遍（不変）の方針と原理原則

行政の基本方針として「町づくりは人づくり」という格言があります。その目的は「持続可能性の追求」にあり、教育も、行政の一部として、「自立した人をつくること」が目的で、これらの一体的な推進が求められます。

現在、本町は、厳しい財政状況下での行政運営を余儀なくされていますが、行政には、こうした状況を打破するための昔から変わらない原理原則があります。

江戸時代に遡りますが、関ヶ原の合戦の敗北以降、幕末まで冷遇され続けた長州藩、上杉鷹山の米沢藩、米百俵の逸話で有名な長岡藩という苦しい財政状況から復活を果たした3つの藩にはある共通点があります。それは、行財政改革、仕事づくり（産業振興）、人づくりの3つを同時進行で推進したことです。つまり、行革を推進し、産業を振興しても、後に続く人材がないと町は持続しないという発想で、人材を最大の資源として捉えていたことがわかります。

これらの藩は、財政的に最も苦しかった時期に、学校を整備し、その学校は、今でも、萩高校、米沢興譲館高校、長岡高校として、現在においても続いており、地域貢献人材を輩出し続けています。

これは、「教育の効果を測るのは時間を要するが、教育に対する投資は町の品格を測る物差しである」を証明した事例であり、高校魅力化の先駆けとなった隠岐島前高校がある海士町も同じ手法で復活を果たしています。

政策は短期と長期の両方の視点が必要であり、行革は短期、教育は長期にあたると思います。

行革を推進しつつ、人づくりにもしっかりと投資することができれば、本町として、明るい未来を展望することができると思います。

また、本町は、高校をつくらなくても、先人から与えられている点で大きなアドバンテージがあります。

この時代の行政を任された世代の責務として、今ある町内の全ての教育機関（保幼小中高）の学びを通じて、子どもたちに地域の魅力と課題を見せると同時に、「君たちと一緒に町を創っていきたい」という想いをまっすぐに伝えることが重要であると考えます。

「財を残すは下、事業を残すは中、人を残すは上となす」という言葉もあるとおり、今、与謝野町は次世代に何を残すのか？が問われていると考えます。

## 10. 第2次総合計画・第2期ひと・しごと・まち創生総合戦略との関係性

高校魅力化推進事業は、総合計画や総合戦略に掲げる約束の未来像を手繰り寄せるための施策であり、魅力化ビジョンも総合計画、総合戦略に接続するものとして位置づけられます。

本町の第2次総合計画の町のみらい像は「人・自然・伝統 与謝野で織りなす 新たな未来」であり、総合戦略の正式名称は、一般的な「まち・ひと・しごと」ではなく、「ひと・しごと・まち創生総合戦略」としており、どちらも、まず人を先に掲げ、町の最高の資源は人であることを明示しています。

本事業は、第1期ビジョン策定時は、総合計画の「教育分野」に位置付けられていましたが、後期計画に入り、「協働分野」に変更されました。これは、基本施策1に示されており、高校生自身がより多様な主体の一員として、まちづくりを担ってほしいという期待の表れでもあります。

<第1期ビジョン策定時>

区分	事業属性
第2次総合計画	(分野5) 魅力ある教育が活力ある人や地域を創るまち (施策3) 生涯学習社会の実現と人権教育の推進 (事業9) 高校・大学との連携・協働の推進
第2期ひと・しごと・まち創生総合戦略	(基本目標1) 与謝野を愛し、多様性を認め合いながら、新しいモノやコトを創出する地域人財をつくる (具体的施策) (ア) 地域で育む地域人財の育成 (イ) チャレンジできる担い手育成

<第2期ビジョン策定時>

区分	事業属性
第2次総合計画 後期基本計画 (基本構想 平成30～令和9年度) (後期計画 令和5～9年度)	(分野7) 住民が主人公になるまち (施策1) 多様な主体による協働のまちづくりの推進 (事業1) 地域人財の育成
第2期ひと・しごと・まち創生総合戦略 (令和2～6年度)	第2次総合計画 後期基本計画に包含

1 1. 京都府・京都府教育委員会との連携

本町においては、高校を支援する前段階から京都府教育委員会との相互理解を大切に、趣旨説明や情報共有に努めてきました。

京都府教育委員会においても、この取組に対する評価は高く、令和3年度に策定された府立高校の在り方ビジョンの中で、コーディネーターの配置の事例が紹介されていることに加え、今後の方向性として、地域とのつながりを活かした教育活動の推進が明記されています。

また、委託事業である探Qゼミ（仮）や、進路実現支援事業（総合型選抜対策講座）の費用については、きょうと地域連携交付金の補助を受けて実施してきました。

さらに、コーディネーター業務については、令和5年度から外部委託に切り替えましたが、こちらの費用についても、同交付金の対象として実施しています。

京都府教育委員会が令和3年度に策定した第2期教育振興プランの基本理念に掲げられている「教育に関わるすべての者が大切にしたい想い」としての「包み込まれているという感覚」は本町のあらゆる教育活動で大切にしています。

今後においても、京都府、京都府教育委員会との相互理解、相互連携を大切にしながら本事業の推進に努めていきます。

## 第2章 第1期ビジョン：学社協働で目指した学び

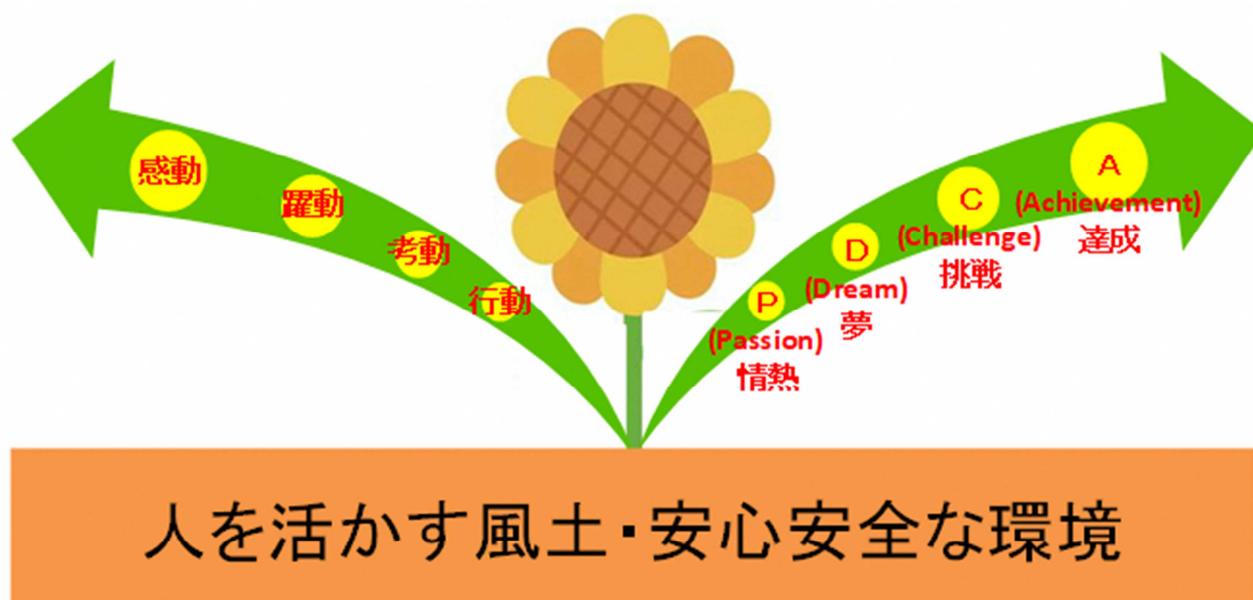
### 1. 第1期ビジョンで掲げた理念

第1期ビジョンで掲げた理念は、「学社協働 地域を創る人づくり 選ばれる学校から選ばれる町へ」そして、「可能性を信じて一歩前へ！未来を切り拓くもうひとつのP（情熱）・D（夢）・C（挑戦）・A（達成）」の2つでした。

未来を切り拓くためには、まず、自分の可能性を信じて一歩前へ踏み出すことから始まります。そして、Passion（情熱）を胸に抱き、Dream（夢）に向かって歩みを進め、未知なることへとChallenge（挑戦）し、苦しみを乗り越えて、Achievement（達成）することで人は大きく成長していきます。

しかし、この最初の一步は自分の意思で踏み出さなければなりません。自ら動けば、行動から考動、躍動から感動へと、成長の枝葉がどんどん広がっていきます。

与謝野町という生徒の成長を温かく支える風土、加悦谷学舎という安心安全な環境のもと、加悦谷学舎で過ごす3年間で、町花「ひまわり」のように、自分の可能性をまっすぐに伸ばして大輪の花を咲かせてほしい。そして、将来は地域を創る人になってほしいという想いを込めて、町と加悦谷学舎もお互いに一歩前へと踏み出しました。



### 2. 学社協働の学びの目的

学生時代は、もっとも自分を磨くことに時間を費やせる期間です。

ただ、家と学校の往復だけでは、視野の広がりや経験値という点で成長の幅が限定されます。

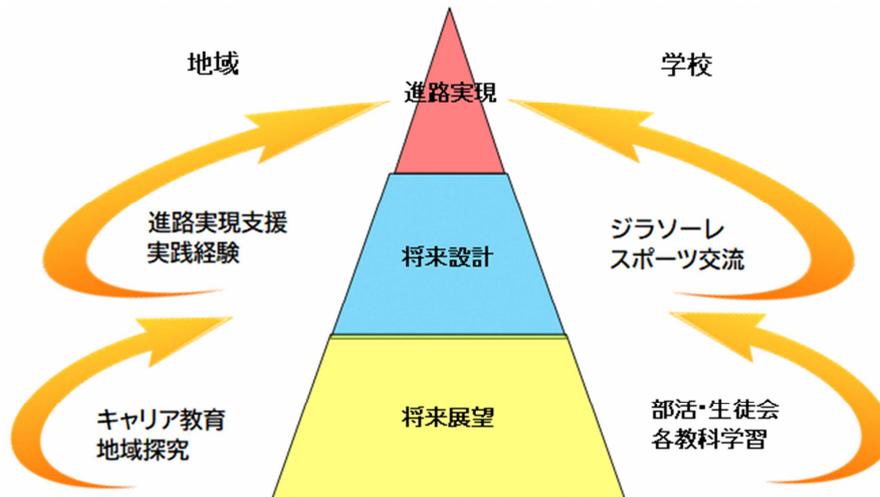
また、家と学校を保護者や先生が常に見守ってくれるプールだとすれば、社会は大きな海に例えることができます。海では、自分の能力をフルに活用しなければなりません。さらに、毎日が難しい選択の連続であり、一人では解決できないこともたくさんあります。そして、数年後には、高校生も、この大きな海で生きていくことになります。

与謝野町と加悦谷学舎による学社協働の学びの特色は、「社会という海との豊富な接点」にあります。そして、高校生が、身近な社会である地域に積極的に飛び出して、学校と社会を往復する中で、幅広く、力強く成長でき、社会で大きく輝くための素地を身に付けることを目的に多様な学びをつくってきました。

### 3. 学社協働の学びの体系図

町と高校の学社協働の学びは、主に、下図の左側、①地域探究・実践経験、②キャリア教育、③進路実現支援を軸としてきました。

加えて、①地域要素を取り入れた各教科学習、②生徒会メンバーを中心とした町長との対話授業、③スポーツ交流時の日程調整や移動支援などの支援も実施し、3年間のトータルで、確実に生徒のステップアップにつながる学びをつくってきました。



### 4. 学舎協働の学びのねらい

#### (1) 成長を加速させる学びのスイングバイ効果

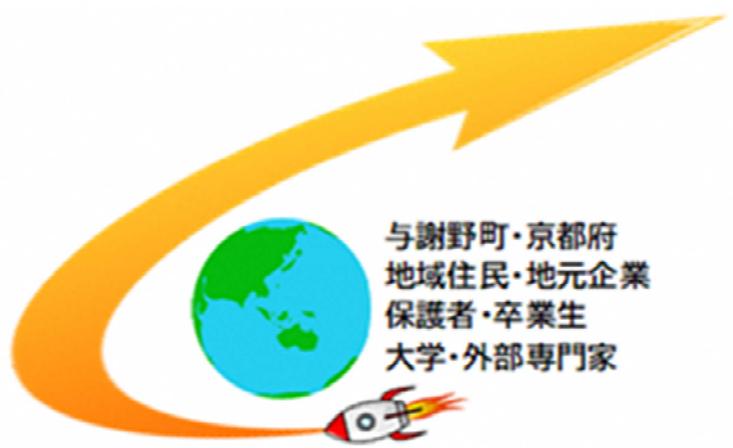
「スイングバイ」とは、宇宙船が天体の引力を利用して速度や方向を変える技術のことです。人は、ふだん生活している場所以外と接点を持ち、異なる感覚に数多く触れることで、トータルバランスが磨かれていきます。

そして、与謝野町と加悦谷学舎にはこのバランスを磨くための環境があります。

高校生は、希望ある未来へと出航する宇宙船のパイロットであり、高校生の成長を大切に考えてくれる地域の多様な人や企業は、魅力という名の引力を持つ天体の役割を担います。

また、「知ることは超えること」という言葉のとおり、高校生が多くの出会いを通じて得た知識を吸収し、自らの引き出しを増やしていくことで、我々の世代や課題を超えていくことを期待しています。

与謝野町は、学校からのニーズに応じて、高校生の成長をより加速させる魅力的な出会いをつくってきました。



## (2) 積み上げと逆算のバランスと往復

各種教科の勉強等、基礎から積み上げる学びは人としての教養につながり、地域探究やキャリア教育における実践を通じて、自ら目標を設定し、そこから逆算していく学びは、困難にひるむことなく、一歩前に踏み出し、考え抜き、乗り越えていく力、つまり、人としての活力につながります。そして、これらは、今、社会から求められている力でもあります。

また、各教科学習では、テストにおける100点という評価基準がありますが、地域探究、キャリア教育をはじめとする学びに点数はありません。その代わりに、今あるもので、今いる場所で、今自分にできる100%を出して取り組めるかどうか問われます。

地域探究の正式名称は「総合的な探究の時間」ですが、この総合という言葉がポイントになります。この時間は、過去からの総合的な知識が基礎であり、その基礎となるのは、やはり、各教科で得た知識となります。

基礎となる知識がないと、自分の最高出力を出すことも、主体性を出すこともできません。さらに、各教科の答えがある学びに100%の力で取り組めなければ、答えのない問いに対して最適な解を導くことはできないと考えます。これは、高校生がこれから飛び出していく社会においても同じことが言えます。

探究やキャリア教育等で、今の自分の100%を確認し、各教科で得られる知識の大切さに気づき、真摯に向き合うこともできる学び。加悦谷学舎では基礎と逆算のバランス、往復を大切に、豊富な社会との接点を活かし、高校生の成長に有効な地域の魅力という要素を取り入れた学びをつくってきました。



### 第3章 第1期ビジョン：学社協働の学びの実践と成果

#### 1. 学社協働の学びの実践

##### (1) 地域探究学習

地域探究については「自分の足元（地域）を見れば人生のヒントがある。その上で、自分の手元を見返せば、他人が欲する強み（個性）が見つかる」をモットーに、自分なりの価値に気づき、意欲をもって一歩前に踏み出せる学びに取り組んできました。

元々、高校では、平成29年度から令和元年度までの3年間、京都府から文化歴史推進校・伝統文化推進校の指定を受け、地域の文化歴史を題材とした学びづくりに取り組んでおり、地域探究の基礎は既にできていました。

令和元年度に、高校魅力化コーディネーターを高校に常駐配置したことをきっかけに、加悦谷学舎の地域探究は飛躍的に進化しました。

当初は、地域との接点が少なく、実践の場を提供できなかったこともあり、探究の成果発表プレゼンにおいても、「こうなったらいいな」「こうしてほしいです」といったコメントがほとんどでしたが、令和3年度入学生から3年間を見据えたカリキュラムができ、徐々に、生徒主体の地域実践が見られるようになりました。

そして、令和4年度入学生の実践では、旧与謝小を活用した廃校イベントや加悦谷学舎を会場とした親子向けイベントなど、ゼロからイチを創出する企画ができるまでになりました。

No.	在籍年度	テーマ	成果	課題
1	令和元年度 ↳ 令和3年度	丹後ちりめん パラスポーツ	協働フィールドワークの実施 教員発案のテーマの実施	主体性 なったらいいな・なってほしい
2	令和2年度 ↳ 令和4年度	総合計画 ⇒地域探究	生徒自ら考え動く実践がスタート	校内にとどまる実践 単発の実践
3	令和3年度 ↳ 令和5年度	総合計画 ⇒地域自由探究	3年間を通じた探究のスタート 地域を舞台に主体的な実践が実現	ゼロイチ企画への期待
4	令和4年度 ↳ 令和6年度	地域自由探究	地域を舞台に主体的で多様な実践 多数のゼロイチ企画の実現	規模や質の持続可能性

##### (2) キャリア教育

キャリア教育については、「誰かを笑顔にするために頑張る人がプロフェッショナル」「計画のない目標はただの願望」をモットーに、高い意識、目標や計画をもって一歩前へ踏み出せる学びに取り組んできました。

下図のとおり、毎年、新たな事業を立ち上げ、手厚く、充実したキャリア教育を展開してきました。企業講話会から対話形式のkayadani 仕事図鑑、企業見学からインターンシップのkayadani 仕事体験と、生徒の興味関心を深めていけるプログラムになっています。

特に、2年生を対象に令和5年度からスタートしたkayadani 仕事体験は、事前挨拶、体験、振り返り、報告発表までがセットになっています。報告会では、受入れ事業所からのフィードバックに加え、1年生全員が参加し、早い時期から進路について考えることの大切さを伝える機会とするなど、学年を超えたつながりを含め、あらゆる学びの要素が詰め込まれた事業になっています。

キャリア教育においても実践経験を重視することにより、将来、踏み出す社会で必要なスキルを確実に身に付けています。

No.	開始年度	事業名	内容
1	令和2年度	企業講話会 対象：1年生全員	目的：地元には仕事がないのではなく知らないことを知る 講師：地域事業者3名 内容：仕事内容、やりがい、地域で暮らす生きがいの紹介
2	令和3年度	Kayadani仕事図鑑 対象：1・2年生希望者	目的：自信をもって進路を選ぶ 講師：生徒が希望する職種に従事しておられる方 内容：少人数の対話形式で実施 理想と現実との差異、今やるべきことを知る
3	令和4年度	2年生企業見学 対象：2年生就職希望者	目的：現場のリアルを見て働く意義を考えるきっかけをつくる 受入：町内事業所 3社 内容：仕事の魅力だけではなく困難な部分や課題も知る
4	令和5年度	Kayadani仕事体験 (インターン事業) 対象：2年生就職希望者	目的：勤労観の育成・自己理解を深める 進路を切り拓く力の育成・地元企業とのつながり 受入：町内外事業所 19社 内容：受入先の事業所で2～3日、実際の仕事を体験する 体験した内容・感想を協力事業所、1年生の前で発表
5	令和6年度	地域講師による模擬面接会 対象：3年生就職希望者	目的：緊張感の中で自分をアピールする 講師：地域事業者4名 内容：模擬面接実施後のアドバイスを今後活かす

### (3) 進路実現支援

#### <総合型選抜対策講座(外部委託)>

与謝野町では、令和元年度に「探Qゼミ(仮)」という名称で、地元中高生を対象に、「教えるく引き出す」をテーマとして、問いや対話の中から答えを導き出すことを目的としたアクティブラーニング型講座を4回シリーズで開催しました。同年度には、1回のみではありますが加悦谷高校の3年生向けに、探Qゼミ(仮)の学びと大学進学を結びつけた講座を開催しました。

豊富な実践に基づき、自分の興味関心を明確にして、主体的に学ぶ力を伸ばしていく加悦谷学舎の学社協働の学びと、大学で何を学び、社会でどう貢献したいかを問う総合型選抜の入試は親和性が高く、「将来の高い知の地域還元」を期待して、令和2年度から総合型選抜対策講座を開設しました。

講座の主な内容は、過去から現在までに得た知識、経験に、大学で学びたいこと、将来の社会貢献を結びつけて言語化し、入試で必要となる志望理由書に落とし込むためのスキルを学ぶというもので、改めて、これまでの自分を振り返り、これからの自分を考える時間を通じて、自信をもって卒業後の進路に向かって、一歩前へ踏み出せる学びを目指してきました。

また、町からのリクエストで、講座の各種ワークの中で適宜、地域という要素を組み入れてもらうこととしました。

令和2年度～令和4年度までは、半年間、約30回シリーズの講座で、進学を目指すほぼ全生徒が受講する人気講座となり、多くの生徒の志望校合格の後押しをしてきましたが、町の財政状況や、府立高校の進路まで町が支援することに疑問を呈する意見もあり、令和5年度は冬休みと春休み期間の開設に縮小し、同年度をもって打ち切りとなりました。

#### <町政説明講座(出前授業)>

近年の推薦入試では、面接において、自分が住んでいる町の施策を問われることも多いという高校からの声を受け、令和元年度から、企画、農林、福祉、教育を担当する町職員が学校に出向き、町の施策の説明、質疑応答などを実施し、町政に対する理解を深める機会をつくりました。

令和3年度までは、推薦入試を受ける生徒を学校で集める講座方式で実施していましたが、令和4年度以降は、個々の生徒の要望に応え、適宜、職員が高校に訪問して説明したり、高校

生が役場を訪問して、担当職員の説明を聞くなど、時と場合に応じて柔軟に対応をしています。

#### (4) スポーツ交流事業

アスリートスポーツコースの生徒と、地元小学生の交流事業は、平成28年度にスタートしました。高校としては、交流を通じて、教えることの喜びや難しさを経験し、将来の体育教師、将来の社会体育の指導者を育成するという目的をもって実施しており、年々、少しずつ生徒の主体性を引き出すスタイルへと変化していきました。

また、移動の関係で、近隣の学校としか交流できないことがネックでしたが、平成29年度以降は、町がマイクロバスによる生徒の移動支援の予算を組み、町内全小学校と交流できる環境を整えました。

生徒は、スポーツの得意不得意に関係なく、体を動かすことの楽しさを余すことなく伝えるため、事前に交流する時間、児童の学年、人数、会場の広さなどを把握し、準備に8～10時間を費やし、万全の態勢を整えて臨んでいます。当日の交流では、普段はしない動きのトレーニング、使ったことのない器具、ハイレベルな高校生の運動能力を見て、毎回、小学生は弾ける笑顔で楽しんでいます。

事業の開始以降、交流を希望する学校も年々増え、令和6年度は、同一年度で初めてとなる町内全小学校との交流が実現しました。

#### (5) 各教科における地域活用

加悦谷学舎では、高校魅力化推進事業の開始以降、各教科においても地域を活用する動きが高まっています。主な取組は下表のとおりですが、その他にも、単発ながら、総合計画策定時に、社会の時間を活用して、町の将来を考えるワークショップなども実施しています。

また、与謝野町では、平成29年度から地元小学生を対象としたイングリッシュキャンプを開催し、加悦谷高校、加悦谷学舎のESS部員にもサポーターとして協力を依頼してきました。この事業は令和5年度をもって終了しましたが、町からの要請に応える形で、令和6年度からは、加悦谷学舎の生徒が先生となって、小学生と交流する事業へと継承されました。

No.	開始年度	教科・事業名	内容
1	令和元年度	家庭科 赤ちゃん交流事業	目的：生命の大切さに対する理解の促進 将来をイメージするきっかけづくり 講師：地元在住の赤ちゃんと保護者 内容：交流を通じて、子育ての楽しさと難しさを知る
2	令和2年度	家庭科 織物実習	目的：伝統産業・ハイレベルな技術に対する理解の促進 講師：織物技能訓練センター指導員 内容：製品ができるまでの工程を知る 手織り、自動織機体験
3	令和2年度	家庭科 フードデザイン実習	目的：技術の習得・プロとしての心構えを知る 講師：地元飲食店のオーナーシェフ 内容：講師の指導を受けながら調理実習
4	令和4年度	国語 俳句：吟行体験	目的：地元ゆかりの文人・町の名所を知る 表現力の伸長 講師：与謝野町学芸員 内容：吟行体験・講師による講評
5	令和5年度	英語 観光ガイド実習	目的：英語を使ってコミュニケーションの楽しさを知る 英語力・表現力の伸長 協力：天橋立観光協会 内容：外国人観光客に英語で天橋立を案内する
6	令和6年度	英語 小高英語交流	目的：英語を使ってコミュニケーションの楽しさを伝える 英語力・表現力の伸長 講師：3年生英語特講受講生 内容：生徒考案のレクリエーションを通じた交流

## (6) 町長対話授業

生徒会メンバーが中心となり、対話をしたいテーマを事前に考え、人生、町づくり、SDG'sなど、毎年、異なる内容で実施しており、令和2年度には、この対話授業から「よさの高校生広報室@みらい」が誕生しました。

令和5年度は、(一社)経営実践研究会や京都市内の大学生のサポートを得ながら、生徒が考えた町づくりの政策提案を実施。令和6年度は、第2期ビジョン策定を踏まえて、高校、町、自分など、みんなにとってのより良い未来をテーマに実施するなど、年を重ねるごとに、より自在性と自由度の高い事業になっています。

## (7) よさの高校生広報室@みらい

高校生が町内の魅力的な人や事業所を取材し、町の公式フェイスブックに記事を掲載、発信する事業で、令和2年度からスタートしました

これまでに、個人・事業所への取材は11回、町フェイスブックへの投稿は18回を数え、毎回の平均リーチ数も2000を超えるなど、町の媒体を活用している効果もあり、多くの皆様に閲覧をしていただいています。

生徒会メンバーを中心に、放課の時間を活用して、取り組んできましたが、現在は、探究学習、キャリア教育等の進化とともに、これらの学びに融合される形になっています。

## 2. 学社協働の学びの成果

### (1) 地域探究学習

ここ数年で、多種多様な探究、実践が展開され、そのレベルやプレゼンの完成度も、年々、向上していますが、なにより、自分の将来と組み合わせた探究テーマを設定する生徒が増えました。部活動に所属していない生徒で、「3年間で頑張ったことは探究」と言える生徒も出てくるようになりました。

町と高校においても、第1期の期間で、下表のとおり、地域探究を実施する意義、メリットを整理し、明確にすることができました。

3年間を通じたカリキュラムができた令和3年度、令和4年度に入学した生徒から、探究学習が終了した時点でアンケート調査を実施していますが、「探究で得た学びや経験が自分の成長につながったか?」という問いに対し、「つながった」と回答した生徒は両年度ともに80%超、「探究は自分の進路に良い影響を与えましたか?」という問いに対し、「良い影響があった」と回答した生徒は、令和3年度生は36%でしたが、令和4年度生は50%と確実に向上しています。

また、令和6年度の探究学習で、地元野菜を活用したクレープづくりにご協力いただいた事業所様からは、「小松菜がクレープの生地になるとは思わなかった。自分自身も勉強になった。」というコメントをいただき、地域との共学、共育、共創の流れも着実に高まっています。

なお、アンケートの「あなたにとって故郷の魅力はなんですか?」という問いに対し、「自分が大切にされているんだとわかる」という回答がありました。

京都府教育委員会が作成した第2期教育振興プランの基本理念には「教育に関わるすべての者が大切にしたい思い」として、「包み込まれているという感覚」という記載があります。

探究に答えはありません。しかし、学社協働でつくってきた探究に込めた思いが生徒に伝わり、受け止めてくれたことこそが大きな答えであり、大きな成果であると考えます。

No.	地域探究の意義	説明
1	みんなに光をあてる学び	通常のクラスではおとなしい子は声の大きい子の影に隠れてしまう 探究は少人数のチームで進めていく分、個性を出しやすい
2	学力・運動神経以外の分野の伸長	各教科の学力、運動神経は遺伝的要素も大きい 探究はそれ以外の分野で自分の可能性を見出すことができる
3	オリジナルな経験	部活に加え、その生徒オリジナルの実践と、そこから得た学びができる 進学でも就職でも大きなアピールポイントになる

## (2) キャリア教育

第1期の期間で、もっとも進化したのがキャリア教育です。3年間を通じて、講話から体験まで、継続的かつ段階的にステップアップできる学びができています。

ここ数年で、生徒自らが、地域探究のテーマとキャリア教育を一体的に捉え、進路実現までつなげていく事例が増加していることは大きな成果であると言えます。そして、この背景としては、生徒の興味関心を踏まえた学びができてきていることと、勤勉で寛容な地域事業所の皆様の協力がうまくかみ合ったことが挙げられます。

1年生対象の進路講話会で、ある地域講師の話に対する生徒の感想を調べたところ、心に残ったフレーズが10個ありました。1人の講話時間は20分ですので、2分に1回は生徒の心に残るフレーズを与えていただいていることとなります。地域講師には、自然体で、ありのままの姿勢で話をさせていただいており、改めて、そのレベルの高さを証明する結果となっています。

逆に、講話会後に、生徒の感想を地域講師に届けていますが、地域講師からも「感想を読んで感激している。自分も高校生に負けないようにまた頑張ろうと思った。」というコメントをいただいております。お互いの意欲を伸ばす相乗効果にもつながっています。

令和6年度の講話会には、地元企業に就職した令和5年度の卒業生も参加し、自分の言葉で仕事に対する想いを伝え、生徒の心に強い印象を残していました。

kayadani 仕事図鑑においては、この取組を知った生徒の保護者からの立候補で実施をした回数あり、今後の保護者への周知、保護者の参画を考える上で良いヒントになりました。

また、キャリア教育を進める中で、学校と地元商工事業者もお互いに一歩前へと踏み出し、連携が大きく進展しました。

令和3年度には、進路指導部（就職担当）の教員と商工会との懇談、意見交換の場を持ち、令和5年度の kayadani 仕事体験の円滑な実施につながりました。

令和4年度には、与謝野町中小企業振興基本条例（通称：みんなでやろうでまちづくり条例）に、「教育機関等の役割」が新たに追加され、お互いを活かし合うことが確認されました。

本町が主催する産業振興会議においては、現役高校生や卒業生が委員として参画し、令和5年度以降は、教育委員会職員が事務局に加わるなど、継続的な連携に努めていることに加え、令和6年度に開催された産業振興会議発案のマッチングイベントには就職希望の2年生が参加しました。

こうした取組の他にも、以前から高校独自の企業訪問は実施しており、ここ数年、丹後中丹地区からの求人は増加しています。

加悦谷学舎では、地元就職による即戦力の地域貢献人材の輩出に力を入れていますが、その背景には、「若い子をしっかりと、じっくり育てていこう」という面倒見の良さや、それを裏付ける離職率の低さという地元企業に対する信頼があります。

学社協働で取り組んできたキャリア教育全体を考えると、高校と地域で積み上げたこの信頼こそが最大の成果であると考えます。

### (3) 進路実現支援

#### <総合型選抜対策講座>

外部委託により、令和2年度から4年間実施しました。大学・専門学校への進学を希望するほぼ全ての生徒が受講し、進路実現を後押しするとともに、毎年80%以上の満足度を得ることができました。

学校からは、「丁寧に指導をしてもらっているおかげで、生徒の頑張りがよく見えるようになった。生徒をいかに伸ばすかを考えた時にこの講座は追い風になっている。」「家計の事情で国公立以外であれば就職を考えていた生徒が見事に合格を掴み、担任と肩を叩き合っ、涙を流して喜んでいて。今回の結果の裏には、この講座の後押しも確実にあった。」という報告と評価を受けています。

また、ある生徒からは、社会に出ても役に立つ内容なので、講座の映像全編を提供してもらえないかという要望も受けました。

本講座の開設以降は、卒業式の答辞の中に、町に対する感謝の言葉が添えられるようになり、受講生の中には、Uターンして保育士になっている卒業生や、小学校教員を目指している卒業生が町内の小学校の教育実習に参加するなど、成果も見えるようになってきました。

講座としては終了しましたが、受講生からは以下のような感想が寄せられており、町として実施した意味はあったものと認識しています。

(生徒の感想)

「自分と向き合ったことで色々な長所を知ることができ、自分に自信を持って試験に取り組むことができた」

「講師は北部出身ではないのに北部の魅力を教えていただき、非常に参考になった」

「〇〇になりたいから大学に入りたいたけではなく、〇〇になってどうしたいかという先まで考えられるようになった。」

「他校の生徒からも羨ましがられた。」

「立派な保育士になって帰って来れるよう2年間励んでいきます！！」

#### <町政説明講座(出前授業)>

福祉や教育など、志望する方向に応じて、町職員が町の施策について説明をしていますが、しっかりメモをとって、質問をしてくる前向きな姿勢から、強い熱意と、将来を担う世代に対する頼もしさを感じています。

令和元年度を受講生からは、「出前講座の内容が面接時にズバリ出たので自信をもって説明できました。」という嬉しい報告をもらい、この生徒は、Uターン就職をしています。

また、町政を説明することは、町職員自身にとっても日々の業務、魅力や課題を見つめ直す勉強、若い世代の意見を聞く良い機会になっています。

### (4) スポーツ交流事業

本事業で交流した小学生、小学校教員から以下の感想が寄せられており、お互いの成長につながる事業として定着してきていることがわかります。

(三河内小6年生)

「僕はスポーツをしているからすごく楽しかったし、家でもやりたいなあ、と思いました。知らないトレーニングを知ることができてよかったです。」

(加悦小学校4年生)

「できなかったことができるようになっていくのがうれしかったし、優しく声をかけてくれたのもうれしかったです。私もまねをしてみようと思いました。」

(加悦小学校教員)

「この日のために計画を立てて、準備を丁寧にさせていただいたことがとてもよく分かりました。子どもたちは目を輝かせながら生き生きと活動していました。本当にありがとうございます。」

(三河内小学校教員)

「年1回の交流を毎年たいへん楽しみにしています。スポーツの交流から、運動面で学ぶこと、高校生の姿勢から学ぶことがたくさんあります。今後も交流を深め、互いに学びあっていけたら嬉しく思います。」

また、本事業を経験して、体育教師を目指して進学した3名の卒業生(大学3年生)が令和6年度の教育実習に参加しました。本事業の目的が達成され、見える成果として表れる日は近いという手応えを感じています。

#### (5) 各教科における地域活用

学社協働の学びは、生徒だけでなく、教員が地域を知る機会にもなっています。そして、各教科学習においても、地域の要素を取り入れ、地域を活かす学びが増えた。つまり、地域を活かそうという教員が増えたことは成果のひとつであると考えます。

また、地域要素を活かした教科学習を通じて、改めて、各教員の学びの設計力のレベルの高さという魅力を感じることもできます。

加悦谷学舎の教員が学社協働の学びをどのように捉えているかについては以下のとおりであり、これまでの積み重ねを通じて、学社協働に対する想いが深まっていることも大きな成果であると考えます。

(教員が考える学社協働の学び)

「学校だけで学びを終わらせるのではなく、自分たちの学習は社会につながっていることをもっと感じてもらいたい。」

「地元には全国、世界に誇れる産業や文化があることを知ってほしい。」

「社会に出た時に今の学びが生きていくように、次は社会を支えていく側になれるように。自己満足の作品をつくる視点から商品価値、社会的価値、福祉的価値のある作品や働くことを意識できる学びが作りたい。」

「経済活動、地域活性化事業の中に高校生のアイデアが入ると面白い」

「高校生も色々な大人と関わって成長していくべきであり、地元の皆様にも高校生の可能性を感じてほしい。そして、地元の大人になることも捨てたもんじゃないという意識が芽生えるといいなと思う。」

「社会と接点を持つことで生徒の成長を促していく町の方針に共感している。教員として、地元に着目を持ち、残ってくれる子ども、帰ってきたいと思ってくれる子どもを育てるために何をすべきか。教科や学校行事等で、地域と連携を続けながらできることを広げていきたい。」

「町と高校の連携から、保幼小中高の連携までつながっていけばよいと思う。」

## (6) 町長対話授業

以前は、一問一答で、対話になっていない回も見受けられましたが、事前に複数回の打合せの場を持ち、徐々に生徒の興味関心が浮かび上がり、テーマを明確にするようになって以降は、対話のラリーが続くようになり、お互いの想いを引き出し合う、高め合う良質な学びの場となっています。

「調べ学習では対話は成立しない。テーマの探究、つまり、探し当てよう、究めようという意識があるから対話が成立する」という言葉のとおり、加悦谷学舎の探究の進化が本事業にも好影響を与えているものと考えます。

令和5年度に参加した生徒は、この対話授業がきっかけで、町への貢献という志が明確になり、与謝野町役場に入庁しました。

また、令和6年度の対話授業終了後、ある生徒が「与謝野町は自分たちの成長につながる小さなきっかけがたくさんある。小さなきっかけを見逃さない人になりたい。」という感想を述べました。これは、今後の学社協働の展開を考える上で、大切なキーワードになると考えます。

## (7) よさの高校生広報室@みらい

地元の魅力に対する理解の促進と発信をテーマとして、令和2年度に発足して以降、地域探究やキャリア教育を補強、補完する役割を担ってきました。この取組を通じて、生徒自ら、探究やキャリア教育を上手くつなぎ合わせ、自分の進路に活かしていこうとする姿勢が見えるようになりました。

地域探究やキャリア教育の進化に伴い、本事業は、これらの学びに包含され、現在は活動を休止していますが、令和5年度に、最後の取材をした生徒は、将来、学芸員、図書館司書を志望し、大学進学後、インターン先に町の図書館を選んでくれました。この事例は、卒業生との関わりという今後の課題に向けてひとつのヒントになるものと考えています。

## 3. 学社協働の学びの成果指標

### (1) 生徒の地域愛着度における肯定的評価（全生徒平均）

令和2年度 68% 令和3年度 69% 令和4年度 72% 令和5年度 76%

### (2) 生徒の地元就職率等

#### ①令和元年度以降、50%以上をキープ

令和2年度 11人 令和3年度 10人 令和4年度 8人 令和5年度 11人

※丹後・中丹地区の給与面・福利厚生面で条件の良い企業からの求人、就職の増加

#### ②Uターン就職者の可視化（与謝野町役場・近隣市町の保育士等）

### (3) 卒業生とのつながり ※教育活動・町の事業で把握できる範囲内

#### ①社会教育事業

イングリッシュキャンプに卒業生（福知山公立大生）がサポーターとして継続参加

#### ②加悦谷学舎地域探究学習

卒業生（福知山公立大生）がアドバイザーとして参加

#### ③産業振興会議

卒業生（福知山公立大生）が委員として参画

#### ④教育実習・インターンの受け入れ

教員志望の卒業生が加悦谷学舎・町内の小学校で実習

学芸員・図書司書志望の卒業生が町図書館にインターン

#### 4. 学社協働の学び（第1期ビジョン期間）の総括

第1期ビジョンの期間となる令和6年度までに、生徒の成長を最大化させるため、多種多様な学社協働の学びづくりに努め、とりわけ座学には失敗がないことから実践を重視してきました。

結果として、保育士を志望する生徒の事例にもあるとおり、多種多様な学びを生徒自身が有機的に活用し、進路実現までつなげていくようになりました。

また、この学びづくりには、地域内外の多くの皆様のご協力をいただき、改めて、この町、この地域が持つ熱量の高さを感じることができました。生徒もその熱量を受け止め、感謝の気持ちをもって学ぶことができています。

加悦谷学舎は令和4年度の第3期生の入学により、1年生から3年生までの全てが加悦谷学舎生となる完成年度を迎えました。そして、この3期生が3年生になり、第1期ビジョンの最終年度となる令和6年度をもって、学社協働の学びについても完成年度を迎えたと総括しています。

なお、生徒が毎年入れ替わる中で、ここまでの進化ができたことは、学校力、そして、コーディネーターの活用力が大きいと考えており、学校として蓄積してきた力を今後を活かし、つなげていくことが、今後のポイントになると考えます。

##### （学社協働の学びの軸）

No.	事業名	取組
1	地域探究（実践経験）	自己理解・自己選択・自己決定の練習 個性（可能性）の把握と実践による自信の伸長
2	キャリア教育	個性と適性の融合（社会における個性の活かし方） 進路の明確化（学びと社会とのつながり）
3	進路実現支援	探究・キャリア教育で得た学びや経験の言語化

##### （保育士志望の生徒の活用事例）

No.	事業名	取組
1	地域探究	テーマ：子育て支援 探究：地元のことども園に足を運び、子どもたちとの交流やニーズの把握 実践：ことども園とのコラボも含めた子育てイベントの開催、成功
2	kayadani仕事図鑑	講師：現役保育士 内容：仕事のやりがい、楽しさ、難しさ、今学ぶべきことを知る
3	よさの高校生広報室@みらい	内容：保育士体験（ミニインターン） 保育士へのインタビューを通じて、その魅力を言語化して発信
4	進路実現支援 町政説明会	講師：子育て応援課職員 内容：子育て支援策、課題など、子育てを俯瞰的に捉える
5	進路実現支援 総合型選抜対策講座	講師：外部講師 内容：知識、経験に将来への想いを志望理由書として言語化

## 第4章 第2期ビジョンの取り組みに向けて

### 1. 各種懇談会の意見

第2期ビジョンの策定にあたっては、多様な立場の方々に、これまでの取り組みを伝え、広く意見を集めることを重視して進めてきました。その中で、今後に向けたヒントとなるご意見を多数いただくことができました。以下にそのご意見を記載します。

#### (1) 産業振興会議

「ワクワクするようなビジョン（ワクワク→湧く湧く→水が湧くように良いアイデアが出てくるような取り組み）をつくってほしいし、今の高校生がどんなことにワクワクするのが気になる。」

「加悦谷学舎には町の象徴であり続けてほしい。」

「より深く事業を知るために、陰の部分、課題についても聞きたいと思った。」

「理想と信念をもって、目標・計画を立てて、実行するという流れを学びの中に入れることは大切で、学校外の先生に話を聞くことは有効だと思う。」

「高校を卒業して、一回、外に出ていろんなことを経験して、また帰ってくる流れができればいいと思うし、町として、次のステップをどう支援するかを考える必要があると思う。」

「規則的にはダメかもしれないが、自分たちで計画したことでお金を稼いでみるとか、話を聞くだけから、さらに上のレベルの経験をさせてあげられたらいいのではないか？」

「自分のやったことが、金銭的に評価されると目に見えて成果がわかる。」

「町にたくさんある魅力を若い人たちにしっかり伝えて、若い人にはそれをしっかり掴んでもらいたい。そのためにも、この事業はもっと強力に進めていくことが大切だと思う。」

「町の障害者教育・福祉は全国から注目されているが、地元では『あたりまえ』と捉えられている。生業をつくろうとするスピリットがある良さに気づけていない。」

「この事業はすごくいい取組で、今は地元には高校があるので、その大切さはわからないと思うが、なくなるともう元には戻らない。加悦谷学舎でできる体験は人としての幅が広がっていくと思うので、まずは、もっとこの事業を知ってもらうことが大事だと思う。」

「振興条例の改正でこだわったのは誰でもわかってもらえることだった。中学生のどんな層をターゲットにするかを明確にして、わかりやすい成長ストーリーを見せるのがいいのではないか。加悦谷学舎は起業もできて、お金も稼げる学校ですとか・・・」

「中学生までふるさと教育を推進するのはどこでもやっていること。高校まで含めて実施することに町の特色が出る。高校にはお金を使ったらいいと思うし、高校にこそ予算を使ったらいいと思う。」

「個人的に志があって外にでる人もいれば、志がないまま外に出る人もいると思う。そこを何とかするのが我々、地域の役割であり、足りていない部分だと思う。ここで頑張りたいと高校生が思ってもらえるように、もっとしっかり魅力を伝えていきたい。」

「小中高生と農業を通じて交流しているが、子どもたちと関わることで大人も初めての経験や発見がある。大人も経験することで学びが得られるので、積極的に接していきたい。」

#### (2) 保護者

「町が高校を支援することは町全体を活性化することなんだなぁと思いました。」

「町の魅力はたくさんあるので、自分自身も子どもたちに伝えていきたい。」

「教育にもっと投資をしてほしい。」

「活動をもっとオープンにして住民の理解が深まれば予算を増やすこともできるのでは？」

「総合型選抜対策講座を復活してほしい。」

「中学の時からもっと交流をして、上を目指していける雰囲気になれば良いのでは？」

「スポーツ交流、ジラソーレなどの取組、進路もしっかりしているのだから、アスリートコースはそのあたりをもっと押してアピールをしたら良いのでは？」

「魅力を創り出すことは難しいですし、加悦谷学舎の存続は課題だらけですね。」

### (3) 教育委員会議

「近年、ここに住みたい、ここで働きたいという若者が少しずつ増えている気がする。ただ、その背景には、親の経済力という問題もあるのかもしれない。」

「魅力ある学校としては、子どもたちが行きたい、親が行かせたいと思うかがポイントだと思う。そして、親が望んでいるのは進学だと思う。」

「受験の際は、都会の子も田舎の子も一律で勝負することになる。塾が少なく、塾に通っている子も少ない地域は不利になる。そういったところも含めた支援ができれば良いと思う。」

「成果があった取組、出なかった取組もあったと思うが、事業そのものについては無駄だとは思わない。ただ、見える効果を出すのも難しい事業だと思う。魅力や特色というのは町が協力していない高校でも取り組まれていることであり、町が関わっているからこういう魅力や特色があるといった違いを見せることができれば良いのではないか。」

「非常に良い取組だと思う。ただ、加悦谷学舎の教育内容を、これから受験をする中学生は知っているのだろうかと思った。」

「どのような支援が必要かはわからないが、高校卒業後も良いことがあるといった何かが見えれば、帰ってきやすいと思った。」

### (4) 加悦谷学舎教員

「校外の大人とのコミュニケーションは成長につながる。地域への協力依頼やフィールドワーク先のアポ取りの連絡などは生徒の成長が見える部分のひとつ。」

「チームワーク、リーダーシップをとりつつ、楽しく活動し、イベントが成功したら自信につながる。生徒自身が主体的に進めることで自信が深まる。」

「コーディネーターの存在は大きい。」

「担当教科にも探究の要素を入れていくという発想が生まれるようになった。」

「地域の魅力をしっかり伝えきれていないとやっつけ仕事になってしまう。」

「正解がないので、教員のアドバイスの正誤の判断がわからない」

「部活に加えて、地域探究を通じて、生徒にとっては、役に立っているという感覚、自己有用感に繋がっていると思う。人前にさらされるという経験も将来の役に立つと思う。」

「親、教員以外の外的刺激の中から成長へとつなげてほしい。」

「DX探究等で地域・大学との連携を進めていければと思っている。」

「野球部の試合には地域からたくさんの方に応援に来てもらっている。大勢の応援や、そうした中でのプレーは小中では経験していないと思うので力をもらっていると思う。天橋立清掃等、ボランティアも良い経験になると思う。」

「部活動の中高連携を進めていきたい」

「『何もしなくても何とかなる』という感覚ではなく、自分の強みに気づける場、輝ける場をつ

くりたい。」

「加悦小の5年生との英語交流を予定している。高校生が小学生に英語を教えるという内容で、教えるという経験を通じて成長につなげてほしい。」

「言われたことだけをやるのではなく、真似からでもいいので、クリエイティブなことができるような方向を見出したい。」

#### (5) 社会教育委員会議

「小中の教員にとっても勉強になる事業だと思う。これまで、こども園や小学校との連携を計画的に進めてきたが、高校にもつながっていくことをもっと意識していきたいし、高校の探究学習やキャリア教育も参考にしていきたい。」

「町の魅力や誇りを伝えるこの事業は素晴らしいし、魅力や誇りを伝えてもらえる今の子どもも幸せだなと思う。」

「高校生は、若さがあって、イキイキとしていて、パワーをもらえる。今後は、自分たちの活動にも若い世代の力を取り込んで一緒にやっていきたい。それができれば、また新たなものが生まれてくると思う。」

「スポーツを切り口に考えると、教えるということは学びにつながるということや多世代交流がキーワードになると思う。現在、中高生と社会人が一緒になってバレーボールを楽しむ会を運営しているが、これも多世代交流につながっている。スポーツ協会の事業では、駅伝も多世代が交流しながらひとつのチームをつくっていくという点で大きな意味があると思う。」

「スポーツ交流やジラソーレで教えるという体験は高校生にとって大きな力になっていると思う。やっていいのかな？からできるかも？というところが成長ポイントのひとつで、学校としてどれだけ自由度を与えられるか？生徒はその自由度をどれだけ活かして応えられるかが問われると思う。」

「高校のない町で社会教育に取り組んでおられる方の話を聞くと、若い人との交流が少ないことを悩んでおられた。地域から感謝される経験、地域への還元という点からも高校の価値はもっと高まるはずだと思っている。」

「学舎としての特色はあるが、とにかくアピールがヘタだと思う。」

「地域DNAというフレーズは大切だと思う。昔から学校をつくったり、定員を増やしたり、府教委を動かすだけの地域力はすごいと思う。」

「単に知識を教えるのではなく、人を教えるということが大切で、誰かの笑顔につながる人を学ぶ学びができれば良いと思う。」

「チャンスがあるたびに発信していくのが良いと思う。また、子どもたちがどう町を見ているかを我々が意識していく必要もある。発信してつながるものが出てきたり、見えるものがあるという方向性が良いのではないか。」

「小中高を一貫して支援できる場は大切だと思う。」

「探究で防災カードをつくったチームも素晴らしいし、こうしたことを通じて、小中高がつながるきっかけになればと思う。」

「スマホには心を開くが、人に心を開かないというのはダメで、今の子どもたちには、社会との関わりをしっかりとつけてほしい。」

「事業の効果はほんの数年でわかるものではなく、今後もこの事業を知ってもらうために、言い続ける、伝えつづけることが大切。町として高校との関わりをもっと広報していただきたい。」

## 2. その他の意見

第2期ビジョンの策定にあたり、開催した懇談会では、上記のとおり、本事業に対する前向きなご意見を多数いただいているところです。

しかし、どんな事業であっても、全員が賛成する事業はありません。否定的なご意見、厳しいご指摘も含めて受け止めることで、事業は鍛えられていくものであり、むしろ、否定的なご意見、厳しいご指摘の中にこそ、今後の事業の成長につながるヒント、事業としてのバランス、着地点が見つかるものと考えます。

ここで、これまでにいただいているもうひとつの観点からのご意見について、以下のとおり記載します。

「事業開始から数年たっているが成果が見えない。」

「そもそも加悦高は府立なのだから、魅力化は京都府がやるべきではないのか？」

「与謝野町が加悦高をいくら応援したところで、京都府が加悦高を廃止すると言ったら、それで終わり。そうなれば、これまでの投資も水の泡になる。」

「現在の与謝野町の最優先事項は財政の健全化。その観点から言えば加悦高も魅力化も不要。加悦高の校舎を払い下げてもらい、中学校の統合先とする。それが合理化であり、それが本当の町の教育の魅力化である。」

「ふるさと学習は中学生までで十分。中学生までで地域への愛着を育くむことは可能。」

「親は子どもの教育のためなら何でもしようとするものだ。実際、保護者はローテーションを組んで、与謝野駅や宮高まで送迎している。加悦高がなくなってもまったく問題はない。」

「Uターンしないのはやりたい仕事がないのが大きな原因。地域探究をはじめ、町が高校の教育に力を入れなくても帰ってくる子は帰ってくるし、帰ってこない子は帰ってこない。」

「大学進学までを支援して、地元から離れる生徒を増やしているように見える。総合型選抜対策講座は打ち切ってほしい。」

「高校魅力化はいつの間にか高校を生き残らせる事業になっている。人口が減っている現実と財源がない中で、いまある施設を上手く活用し、住民が納得できる方向も検討してください。」

## 3. 今後に向けた課題

### (1) 学校が抱える課題

- 入学者数の減少
  - ⇒令和4年度以降、定員割れ（丹後全体で下がっている）
  - ⇒府内の高校生の進学率は7割超で、進学なら宮津学舎が有利というイメージ
- 運動能力優秀者の圏外、府外への流出
  - ⇒男子生徒の流出の増
- 生徒数の減少に伴う教員数の減少
  - ⇒マンパワー不足による個人負担の増
  - ⇒地域探究という幅広いフィールド、テーマへの対応増
- 生徒アンケートによる学校生活トータル満足度の下落
  - ⇒学習面の評価は向上している
  - ⇒高校の魅力発信の最適任者は生徒自身であることを考えると課題

## (2) 与謝野町が抱える課題

- ・ 厳しい財政状況  
⇒ 地域住民の経済状況の厳しさ
- ・ 持続可能な推進体制  
⇒ 組織的なバックアップ体制の構築  
⇒ 産業、移住定住との連携の強化
- ・ 学社協働の最大化  
⇒ 現場の教員が求める内容の反映
- ・ 広報・PR不足  
⇒ 有効な広報・PR体制の検討

## (3) 保護者への周知・保護者との協働

- ・ 令和6年度のPTAの取組  
⇒ 文化祭の模擬店が復活  
⇒ PTA主催の進路講演会の開催  
⇒ 子どもが卒業しても協力したいという保護者の見える化

## (4) 卒業生とのつながり

- ・ インターン、教育実習等、卒業生とのつながりは確実に強くなっている
- ・ 継続的なつながりができる体制

## 4. 今後に向けたキーワード・取組

### (1) 第1期で得たヒント（今後の学びづくりに向けて大切にしたい観点）

- ・ 成長につながるきっかけをつかめる学び（生徒の声）
- ・ 自信、感謝、チームワークを感じられる学び（生徒・教員の声）
- ・ リアル感、ライブ感にあふれる学び（実践重視）
- ・ 教える・伝える経験（保幼小中高連携・学年間連携）
- ・ 与謝野町高校魅力化ビジョンから与謝野町地域学校協働活動ビジョンへの進化

### (2) 地域探究を始めとする学社協働の学びの総称・別称・愛称

- ・ ヨサノクエスト（通称：ヨサクエ）

### (3) 事業の周知・広報

- ・ 有効な周知方法を検討し、生徒の成長につながる良質な出会いづくりへ

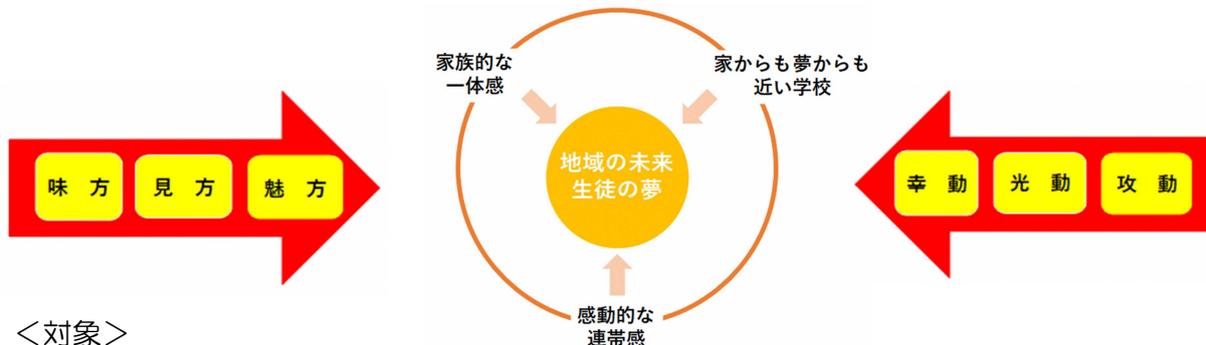
### (4) 卒業生とのつながり

- ・ 担任とのつながりから学校としての蓄積へ
- ・ 卒業生による進路アドバイス等、良質な出会いの循環へ

## 第5章 第2期高校魅力化ビジョンが目指すもの

### 1. 基本理念

「学社協働」 ～与謝野町版 三方よし（味方・見方・魅方）の学びづくり～



#### <対象>

高校魅力化の目的は、生徒と地域、双方の意欲を伸ばしていく相乗効果にありますので、この理念は高校生と地域の両方が対象となります。

#### <学社協働>

第1期ビジョンに掲げたこのフレーズは、現在、加悦谷学舎のスクールポリシーにも入っており、共通言語として定着しました。「連携」とは、「既にできあがっているもの同士をつなぎ合わせることを意味し、「協働」とは、「より幅広い組織同士が企画段階から一緒に練り上げ、交流することによって互いを高めていくこと」を意味します。

「集団知は個人知に勝る」という言葉がありますが、学校と地域が、連携を超える協働に取り組むことによって、それぞれが抱える課題を力強く超えていくことができます。

与謝野町と宮津天橋高校加悦谷学舎は、京都府内においても小さな存在です。

しかし、両者が協働することによって、個性と地域の両方が大きく輝き、確かな存在感を示すことができる人づくりを目指します。

#### <与謝野町版 三方よし>

##### ◎味方（みんな）（安心安全な場づくり）

みんなが安心安全で、共に学べる環境

高校生（卒業生）が「この町には自分の味方がたくさんいる！」「この町には自分の居場所がある」と感じられる環境

##### ◎見方（みえる）（良質な出会いづくり）

多様な見方を吸収し、共に育つことができる環境

地域は高校生に多様なものの見方、考え方を伝え、高校生の視野の広がりにつなげる

高校生は地域に斬新なものの見方、発想を伝え、地域づくりに新たな視点を加える

##### ◎魅方（みらい）（協働による魅力ある地域づくり）

魅力という、そこにしかないもの、人を惹きつけてやまないもの、個人や地域が持っている多様な価値に気づき、認め合う環境

お互いの強みを活かして、魅力ある未来の方向性を共に考え、共に創る環境

令和3年度に京都府教育委員会が実施した高校生アンケートにおいて、「在籍する学校を

選んだ理由」のトップは「自宅から近い・通しやすい」でした。

第1期の期間を通じて、町と学校の距離は確実に近くなりました。

今回、新たに掲げる「与謝野町版 三方よし」の理念のもとで、「家からも夢からも近い学校」、そして、みんなが「家族的な一体感」や「感動的な連帯感」を感じられる環境づくりを目指します。

## 2. 基本姿勢 「攻動・光動・幸動」

### (1) 攻動

教育とは与えられる環境を意味し、勉強とは、自ら進んでやることを意味します。

また、チャンスは訪れるものと求めるものの2種類に分かれます。

現在の町を取り巻く状況は、人口減少、厳しい財政状況など、課題山積ですが、そういう時こそ、自ら進んでやる姿勢、チャンスをつかみに行く姿勢が大切であると考えます。

「攻撃は最大の防御」という言葉がありますが、あくまでも攻める先は相手ではなく、自分自身です。

地域の中で、イキイキと暮らしている多くの人たちと高校生の瑞々しい感性がつながる学びを通じて、自分自身と真摯に向き合い、視野を広げ、視座を高めることで、自信をもって、自分らしく生きるためのヒントを発見することとします。

### (2) 光動

自分で思う自分らしさは、自分では気づきにくいものであり、時として自分勝手につながることもあります。

逆に、他者から見る自分の長所の方が社会で通用する自分らしさにつながることも多くあります。

チームワークを大切に組み込む学びを通じて、自分が思う自分と、他者から見る自分を組み合わせて、誰もが必ず持っている社会の中で自分を活かしていける光と共に学ぶ仲間の光の発見に努めることとします。

### (3) 幸動

与謝野町と加悦谷学舎では、地域を活用しながら、できなかったことができるようになる喜びと、他者に貢献することで喜べる自分を感じられる学びづくりを目指しています。

さらに、こうした学びを積み重ねることで、普段の自分がどれだけ保護者や先生、地域に守られているかについても気づくことができます。

周囲への感謝を大切にされた学びを通じて、「自分ならできる!」という感覚(個人的自立)に加えて、「自分一人では何もできない」ということも理解し、自分の責任を果たしつつ、他者を頼る、チームで対応できるスキル(社会的自立)を磨き、最終的に、自分の幸福を掴み取り、社会にも幸福を与えられる人づくりに努めることとします。

## 3. 期間

令和7年度～令和9年度までの3年間とします。

なお、毎年、事業内容を精査し、改善につなげていきます。

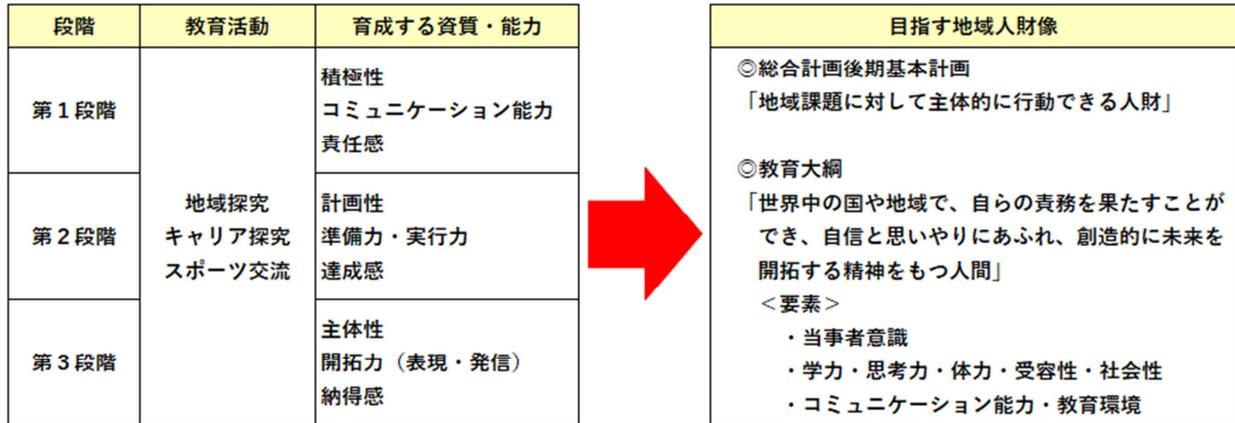
## 第6章 高校魅力化ビジョンの具体的な事業や取組み

### 1. 学社協働の体系図

加悦谷学舎は、地域と個人の幸福の両立を目指したスクールポリシーを掲げています。

また、与謝野町では、総合計画後期基本計画や教育大綱において、地域人財の理想像や理念を示しています。

高校と町が育成する資質を体系的につなぎ合わせ、将来を担う地域人財の基礎となる力を育むこととします。



### 2. 学社協働で取り組む具体的施策

<b>（1）地域探究学習の推進</b> ① 総合的な探究の時間の内容的充実と効率的実施の両立 ② 各教科学習における地域教育資源の活用の推進 ③ 中高連携の推進（探究図鑑の作成等） ④ 校外活動の推進（部活動型・有志ボランティア型・生徒提案型・主権者参画型）
<b>（2）キャリア教育の推進</b> ① 進路講話会・企業見学・模擬面接会の実施 ② Kayadani仕事図鑑の実施 ③ Kayadani仕事体験の実施 ④ 産業振興会議提案事業との連携 ⑤ 町政説明会の実施（随時開催：講座形式・対話形式）
<b>（3）スポーツ交流の推進</b> ① スポーツ交流事業の拡充（中学校との交流）・シラソーレへの接続 ② 部活動（中学校）の地域移行における連携
<b>（4）新たなつながりの構築</b> ① 卒業生との連携・交流の推進 ② 町が関わりを持つ学校・団体との連携・交流の推進（香里ヌヴェール学院等）
<b>（5）持続可能な魅力化推進体制の構築</b> ① PTAも含めた魅力化推進体制の検討 ② 転任・新任者向け魅力化説明会の開催
<b>（6）積極的な魅力の発信</b> ① 高校生による発信の強化（広報よさの・有線テレビ・町SNS等） ② 多様な場における事業実績・進捗状況の報告・意見交換

### 3. 現状と目標設定・調査手法

項目	現状・目標		調査手法
(1) 地域探究学習の推進	現状	地域愛着度 肯定的評価 76%	アンケート調査
	目標	地域愛着度 肯定的評価 80%	
	現状	将来の地域貢献人財の可視化	アンケート調査
	目標	Uターン志望者の増	
(2) キャリア教育の推進	現状	地元就職率 50%超	実績
	目標	地元就職率の維持	
(3) スポーツ交流の推進	現状	小学生との交流	実績
	目標	交流範囲の拡充	
(4) 新たなつながりの構築	現状	単発的なつながり	実績
	目標	学舎・町としてのつながりづくり	
(5) 持続可能な魅力化推進体制の構築	現状	継続的な体制なし	実績
	目標	継続的な体制づくり	
(6) 積極的な魅力の発信	現状	単発的な発信のみ	実績
	目標	生徒主体による継続的な発信	

## 第7章 高校魅力化ビジョンの推進体制と役割分担

### 1. 各ステークホルダーの特徴

#### (1) 高校（教員）

地域のことは詳しくないが、学びを設計できるのは教員のみ  
勤務範囲が広域であるため、地域という概念を広く捉えることができる

#### (2) 行政

地域のことは詳しいが、学びの入り口しかつけない  
地域という概念が基礎自治体に限定される分、地域の未来を諦めない情熱がある

#### (3) 地域

熱意ある人たちは多いが、高校にどう協力していいかわからない  
人は自分が経験した社会しか知らないが、本町は約2万人が経験した社会がある

### 2. 推進体制

第1期においては、事業の円滑な推進を図るため、町、高校、地域で、継続的に議論、チェックできるワーキングチームの設置を掲げましたが、結果的に組織としての動きには至りませんでした。

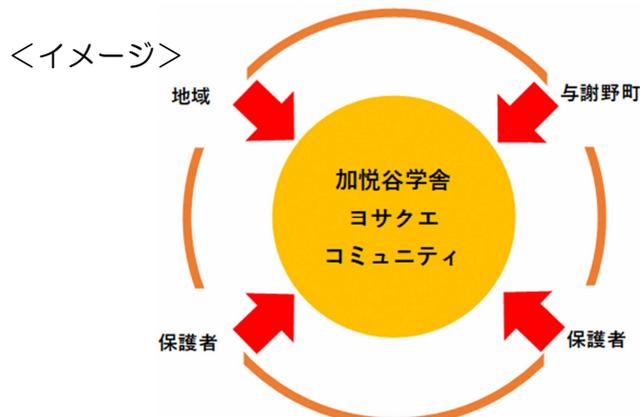
ただ、町と学校と町で、必要な時に、必要なメンバーで、適宜、打合せや意見交換を実施することで、良好な関係性を築いてきました。

しかし、ここに地域や保護者をどう組み込んでいくか？、誰にメンバーになっていただき、どんな役割を果たしていただくのか？については課題として残りました。

今回、第2期ビジョンの策定を通じて、産業振興会議をはじめ、立場の異なる多様な地域の皆様に、本事業の趣旨や内容を説明したところ、今後に活かせる前向きなご意見を多数いただくことができました。さらに、その中で、地域、保護者の皆様も、生徒の成長が将来的な地域の活性化につながるという意識を自然な形で理解されていると感じることができました。

そこで、第2期ビジョンにおいては、会議の目的化を避ける意味も含めて、効率性と可変性を意識し、組織にとらわれない推進体制として、「ヨサクエココミュニティ」の設置運営を目指します。これは、町と加悦谷学舎の協働による教育活動にご協力いただける皆さんがつながるゆるやかなコミュニティで、必要な時に、必要なメンバーで、必要な情報共有、意見交換を実施することを想定しています。

いずれにしても、適切な協働を進めることにより、生徒が、「自分は期待されている存在であり、地域や学校に包み込まれている」と感じられる教育環境を構築することとします。



## 第8章 与謝野町が誇る地域DNAと高校から学舎へと引き継がれる加悦谷DNA

町の歴史は、その町独自のものであり、地域DNAとは、町の歴史の中で連綿と継承されてきたもので、その町で生まれ育った誰もが持っている精神性を意味します。

そして、与謝野町地域DNAは加悦谷高校から加悦谷学舎にもつながっています。

ここで、両者のDNAとそのつながりについて、紹介しておきます。

### 1. 与謝野町が誇る地域DNA

#### (1) 丹後ちりめんの歴史

丹後の織物は約1300年前からあったという記録が残っています。しかし、京都の西陣織より良いものが作れなかったため、売れない状況が続いていました。

また、もうひとつの主産業の農業も、その年々の気候に左右されるので、地域全体の生活が安定しないという状況が続いていました。

そこで、2人の腕のいい職人が、当時、秘密だったちりめんの技術を習得するため、京都に向かい、地元に残った1人が、2人の家族のサポートをすることになりました。

当時、秘密だったものを学びに行くわけですから、2人の行動は命がけでしたが、2人はしっかり技術を習得し、その技術を惜しみなく地域に広めていきました。

その後、ちりめんは丹後でつくって、西陣で売るというスタイルが確立され、ちりめん産業は、300年の長きに渡り、地域の発展を支えていくこととなります。そして、人々の暮らしに余裕が生まれたことによって、祭りを始めとする様々な文化が花開いていきました。

この3人の始祖から始まった丹後ちりめんの歴史は、苦境にあっても諦めない「挑戦心」を地域DNAとして残しました。

#### (2) 加悦鉄道の歴史

令和7年に与謝野駅は100周年を迎えますが、この地域に鉄道を敷設する際、与謝野駅から豊岡までを現在のルートでつなぐか、加悦地域を通過つなぐかの選択肢があり、最終的に現在のルートが選定されました。

そこで、地域住民が出資をして、加悦鉄道が大正14年に開業し、昭和60年の廃止まで、地域の足として、物流輸送の要として、大きな役割を果たしました。

丹後ちりめんの始祖の歴史から約200年が経過し、潤った財を惜しみなく公のために投じる姿勢からは、この地域に「公共心」「利他の精神」がしっかりと育っていたことがわかります。

#### (3) 加悦谷高校、与謝の海支援学校の歴史

加悦谷高校は、「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に、当時の加悦谷8カ町村、京都府、教員、地域住民など、あらゆる立場の人の教育にける熱意を結集して創立されました。

加悦谷高校創立25周年記念誌を開くと、創立の際、用地取得に地元村議が奔走したこと、用地造成に村の教育費の約半額を投じたこと、最初のテニスコートは教員と生徒がローラーを引いてつくったこと、校舎竣工の内祝い、当時の村長が子どものようにしゃいでいた様子などが記され、高校がまさに地域の希望の光であったことがわかります。

その後、この町の人たちは、同じ経緯で、与謝の海支援学校の創立に尽力しました。支援学校の創立は昭和45年で、国の法律ができる9年前にできました。京都府で2番目にできた支援学校で、知的障害児を受け入れた学校としては、京都府初の学校でした。そして、支援学校

の生徒たちが他校の生徒と交流したいと要望し、その要望に応えたのが、加悦谷高校の生徒たちで、その交流は50年を経過した今でも続いています。

誰一人取り残さない教育を目指して創立した経緯は、SDG'sを40年以上も前に実践した取り組みであることがわかるとともに、両校の創立の歴史からは、みんなで力と想いを合わせて、より大きなことを成し遂げる「協働心」を学ぶことができます。

#### (4) 地域DNAのまとめ

丹後ちりめんの挑戦心から始まり、加悦鉄道で公共心へと発展し、協働心によって、学校づくり、教育づくりへと行き着くところに与謝野町らしさ、与謝野町の魅力を感じることができます。

こうした地域の誇りある精神性は、今を生きる我々にも息づいており、この地域DNAを深く掘り下げ、今ある魅力に気づき、磨くことが、新たな魅力の創出につながるものと考えます。

さらに、「地域の深掘りはグローバルにつながる」という言葉のとおり、自らの足元や背景を理解することが、視野と可能性を大きく広げ、世界のどんな場所でも自信と思いやりをもって、新たな未来を切り拓いていく力に結実していくものと考えます。

## 2. 加悦谷高校から加悦谷学舎へと引き継がれる加悦谷DNA

加悦谷高校は昭和23年の創立からまもなく、大学に進学する生徒が増え、加悦谷高校に行けば望む進路は得られるというイメージが定着していきました。その後、加悦谷高校を卒業した生徒たちが教員となり、高校の発展、次世代の育成に尽力しました。

加悦谷高校は令和3年度に最後の卒業生を送り出し、74年の歴史に幕を降ろすとともに、その伝統は、加悦谷学舎へと継承されました。

高校のスクールガイドを開くと、加悦谷学舎は「常に新しいことを取り入れる」という記載があります。「常に新しいことを取り入れる」ためには、「軸」をもって「変化」をしていくことが必要です。与謝野町としては、この「軸と変化」が加悦谷高校から加悦谷学舎へと引き継がれた伝統、すなわち、加悦谷DNAであると捉えています。

ここで、今後の町と高校との協働においても大切な姿勢となる加悦谷DNAについて、事例を交えて説明します。

#### (1) Ⅲ類からアスリートスポーツコースへの軸と変化

昭和60年度から平成23年度まで、加悦谷高校にはスポーツに秀でた生徒を意識した普通科Ⅲ類が設置されており、体育系部活動を牽引するとともに、平成19年度には、地域開放型スポーツクラブ「ジラソーレ与謝スポーツクラブ」が発足し、スポーツを通じた地域の活性化に貢献してきました。

平成26年度からⅢ類を継承する形で、アスリートスポーツコースが設置され、さらに地域連携が進化し、平成28年度から地元小学生との「スポーツ交流事業」がスタートしました。

この事業は学校単位の交流で、生徒が先生役を務め、小学生に体を動かすことの楽しさを伝えるというもので、特色は交流メニューも生徒自身が考えている点です。交流する学年、人数、会場などを踏まえて、メニューを変化させているため、毎回、新鮮でオリジナリティにあふれた内容で実施しています。

また、生徒が動き、教員は円滑に交流が実施できるよう支援するという主体と主導の balan

スも絶妙です。

高校生による交流中の熱心な指導はもちろん、交流前後の準備、片付けも手を抜かない姿勢を見るだけでも、小学生にとってはいい勉強になっています。

「人は教えることによって、もっともよく学ぶ」、「人は得ることで生計を立て、与えることでやりがいをつくる」という言葉がありますが、10代で、高校生で、人に教える、与える経験ができる機会はなかなかありません。

ジラソーレもアスリートスポーツコースの生徒が継承していますが、近年は、コロナの影響もあって、参加者が1人の時もあります。

しかし、高校生アスリートは、そのたった1人の参加者を大切に、みんなで楽しい時間をつくってくれています。

高校生は、日々のトレーニングで競技者としての強さを追求しています。さらに、こうした経験を通じて、優しさも身に付けて、人としてカッコいいアスリートへと成長しています。

## (2) 合唱部の軸と変化

合唱部の混声における実績については説明不要であり、国内外で高い評価を受けていましたが、生徒数の減少に伴い、コンクールへの出場が難しくなり、平成27年度からアカペラへと移行しました。

その後は、地域イベントが主な発表のステージとなり、コロナ前は、月2回の出演依頼があるなど、地域貢献ナンバーワンの部活動になりました。

合唱部のアカペラで印象的な事例としては、令和元年9月29日に岩滝体育館で開催した青年学級北部交流会が挙げられます。

青年学級とは、勤労中の知的障害者（学級生）が社会的に孤立しないよう、学習会、交流会を通じた親睦の促進を目的としている団体で、年1回、綾部以北の市町の青年学級が合同で交流会を開催しています。与謝野町は令和元年度が当番で、合唱部に依頼し、アカペラパフォーマンスを披露してもらいました。

当日は、いつもどおり、生徒が歌にダンスも交えて盛り上げてくれていましたが、2曲目に入ったあたりから、それまで座って聞いていた学級生たちが立ち上がり、生徒の近くまで行って、一緒に歌ったり踊ったりするようになり、熱気と一体感あふれる空気に包まれました。

知的障害において、最も苦勞するのは意思疎通です。しかし、高校生の歌は、学級生たちの心にしっかり届き、彼らの思い思いの表現を引き出していました。

後日、担当者による振り返りの会議では、「素晴らしいパフォーマンスだった」「あの合唱しか印象がない」という意見があり、改めて、「加悦谷に合唱部あり」「大人を超える高校生」という印象を強く残したイベントとなりました。

## (3) 加悦谷DNA（軸と変化）のまとめ

上記の事例で共通しているのは、スポーツや歌という軸を持って、時代に応じて適切に変化し、新しい要素を取り入れたこと。その新しい要素のひとつとして、発表の場に地域を選んだことが挙げられます。

生徒自身も学校が新たにつくった環境を活かして、チームワークを大切に、発表の場を想定し、準備を整え、本番では、今の自分たちにできる精一杯、一生懸命な姿を見せてくれています。

だからこそ、期待を上回るパフォーマンス、交流を通じて、多くの笑顔を引き出すことがで

きているのだと考えます。

「人は道によって尊し」という言葉のとおり、自分の興味関心のあることに真剣に打ち込んでいる子は、そのことに関しては大人に負けない知識と能力を持っています。

そして、高校と地域の距離を近づけることによって得られる効果はここにあると考えます。

大人になると、多忙であるが故に、これまでの経験を盾に惰性で物事に組み込んでしまいがちです。そうした中で、高校生の純度の高い一生懸命、精一杯な姿を見れば、地域の大人も本当に大切なことは何かを考える機会になります。

改めて、生徒は、今、自分たちにできる精一杯、一生懸命な姿を見せる。そこで得た経験、場数を自信につなげていく。地域は、高校生に学びを与えると同時に、高校生からも学び、地域の適切な変化につなげ、地域の誇りを次世代へとつなげていく。

与謝野町としては、加悦谷DNAを町の財産と捉え、生徒と地域のお互いが輝き、高めあえる場づくり、場つなぎを応援し、真の協働を進めていきたいと考えています。

### 3. まとめ

地域DNAを源流としてできた学校から学校独自のDNAが生まれ、そこで育った人財がまた地域DNAを継承し、新たな地域DNAを生み出していく流れは、これまでから自然な形でできていたことがわかります。

逆に、自然な形でできていたから気づけなかった魅力であるということもできます。

本町においては、今後においても、互いのDNAの往復を地道に積み重ね、地産地照の人づくりに取り組むことで、希望ある未来へとつなげていくこととします。